



Toy box

R18



※この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。原作者様・
出版社様とは一切関係ありません。

♡濁点喘ぎや尿道責め等性的描写が含まれております。18歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。

—ある夜の話—

冷静になってみれば、その瞬間の自分は血迷っていたのだろう。届いたばかりの段ボールを前にミクリは深く頭垂れていた。苦悩を刻む横顔も色気があって素敵だとファンが見れば放ってはおかないと、果たして宅配の中身を知れば幻滅では済まないかも知れない。

床に鎮座する荷物の正体。所謂『アダルトグッズ』が詰まった光景は、禍々しい玩具箱のようで正視に堪えぬ有り様だった。

「……コレを、使うのか？ よりにもよってあのダイゴに…？」

悲愴感すら漂う声だが、大前提としてミクリとダイゴは恋仲である。性別とか立場とか様々な葛藤を経て今の関係に落ち着いた過程は割愛しよう。語るうちに夜が明けてしまう。

とかく相思相愛となったふたりだが、プレイボーイの男をして頭を抱える新たな問題が浮上していた。つまりは、夜の呪みだ。

(相談もなく購入してしまったが、本当にこんなモノで悦くしてやれるのか……いや、そもそも低俗な性具だと私が白い目で見られるのが先か)

男との性交経験など互いにある筈もなく、片手で足りる程度のセックスは毎回不完全燃焼で終わっていた。女性とは勝手の違う肉体を傷つけそうで過剰に労ってしまうミクリと、愛されるため纖細な内側を暴かれる感覚にいつまでも強張ってしまうダイゴ。互いの絆が揺るぎないことだけが救いだが、このままでいい訳がない。

そもそも、あくまでもセックスは恋人と楽しむ一つの愛情表現に過ぎない。付き合っているから必ずしなければいけないものでもなし、ベッドの上で居心地悪そうな青年の負担にしかならないなら控えるべきだ。

……などと考えておきながら。ネットで見つけたあやしげな謎い文句の数々に誘われてアダルトグッズを購入したとは、我ながら軽率さに眩暈すら覚える。

他人の熱が身体を這う違和感が抜けないなら、いっそ無機物であれば余計な緊張も抱かずに済むだろうか、なんて。発想の着地点として最悪もいいところだった。煮詰まった思考で模索する解決策などろくなものではない。

「……うん。やはり処分しよう」

高潔がヒトの形を成した男を想い、開封したばかりの段ボールを閉じる。肩にのし掛かる疲労感で、とりあえずと小さな箱をベッドの下の空間へと押しやった。思春期の少年のような隠し場所だが、ちょうど今夜から訪れる恋人はプライベートを漁る無作法者ではない。彼とゆっくり休日を過ごして、後日分別して始末すればいいだろう。

そう、思っていたのだ。

◇◇◇

ガタンッ！

寝室から響いた物音にミクリの心臓が跳ねた。なにか、重い物がぶつかったような。シャワーを浴びた直後の全身からサッと血の気が引く。中にはダイゴが、先に身を清めた青年が寛いでいる筈だった。

「ダイゴ……ッ！」

表面上は変わりなく映ったが、なにせ不摂生に慣れた男である。瘦身が床に倒れ伏す嫌な想像が脳裏を通り、矢も盾もたまらずぶつかるようにして扉を開け放った先。

「——ミクリ。これは……」

呆然とカーペットに座り込む銀灰の恋人、その手元に釘付けとなった。

目に痛いショッキングピング。シリコン素材の模すあからさまな男性器を手にして、未知に遭遇した琥珀の双眸がチカチカと瞬く。

「う、うわああああ!?」

ひっくり返った宅配の箱。散らばった卑猥な道具の数々。傍らに、ふよふよと浮くダンバル。ゴミ箱行きになる予定の秘密が、無残にも白日に晒されていた。

「………弁解させてほしい」

血を吐くような懇願に刺さる哀れみの眼差しが切ない。事故で開かれたパンドラの箱は再び中身をかき集め、サイドテーブルに鎮座している。肝心の議題とはいえ、心境的には今すぐにでも捨ててしまいたい。ダイゴの目に触れてしまった時点で手遅れなのだが。

「いや……その、こちらもすまなかった。最近捕まえた若い個体なんだが、目新しいものにはなんでもとっしんして確かめる子で……」

「なるほど、だからあの惨状か……」

青年の腕に抱かれ单眼できょとりと見つめるダンバルに脱力する。好奇心旺盛な性格のようだ。メタグロスやこうてつを含め彼の手持ちは落ち着いた子が多かっただけにしつけも大変だろう。褒められた行為ではないが純粹なポケモンに罪はない。

見つかるまいとかを括った自分に非がある。けれど家具や電子機器を壊されてもたまらないでの、この家ではもう勘弁しておくと鋼の体を撫でてやれば、気まずい表情のダイゴもふっと目尻を和ませた。

「エリザベスたちに遊んでもらっておいで」

おやすみのキスをひとつ。リビングに幼い手持ちを送り出して寝室のドアを閉ざし、ベッドに並んで座った男の頬が淡く色づく。

「それで……あの道具は、今夜……使うのか？」

「ん、っ?!」

「? 違うのか？」

「いや、違わない! 違わないが……もっと、他にないのか。勝手に妙な物を買い込んで、とか、怒ってもいいだろう」

てっきり、嫌がられると思っていた。糾弾も覺悟していたのに、実際の恋人は怒りの気配どころか不思議そうに小首を傾げる。無防備さゆえかいとけない印象すら受ける麗顔に恥らいが艶かしさを添えて。淫靡な夜の空気に生唾を飲み込む。咄嗟に抱き寄せた細い肩は、びくりと跳ねたきりそれ以上の抵抗を見せなかつた。

「……悩んでいるのはお前だけじゃない。僕だって、はやく行為に慣れるにはどうすればいいか考えていた」

すり。銀糸が首筋を擦る。気位の高いペルシャンがおずおずと甘えるにも似た仕草。

「お前が有効性を見出だした手段なら、反対する理由もない」

「大胆なコトを言うね。本当にあの玩具を使われてもいいって? 自分が……どうなるかもわからないのに」「ん……っ…」

薄い下腹を撫でる。着衣越しに膚の瘡みをつついで反応を窺うと、白皙の肌がじわじわ耳まで紅潮していった。健気にも食われるために熟れる果実を前にして腹の底が飢えを叫ぶ。

「…っ…わからないから……おしえてくれ。ミクリ、おまえがぼくに……ぜんぶ」

「………ツッ」

たどたどしい誘い文句の破壊力ときたら。婀娜めく肢体を組み伏せ、思うがまま貪り尽くしたい衝動を抑えるのに途方もない労力を必要とした。

ああ、理解している。ダイゴの望む通り物慣れない体を拓き、淫猥な性具で一晩たっぷりと快楽を叩き込んでやればいい。まずは強引にでも抱かれる側の悦びを刻んで、性行為への苦手意識を塗り替えればいいのだ。けれど、でも。

「—ありがとう、ダイゴ。でも、使うのは次の休みにしよう」

ミクリは、このいじらしい青年を大切にしたかった。

「な、んで……」

「まさか私も、お前が了承してくれるとは思わなかったんだ。今日届いたばかりで器具の消毒もしていないし、それに」

「?」

こつり、額を重ねる。弱視を患った瞳がこちらを捉えるのを待って、唇を優しく啄んだ。

たとえセックスができなくたって私はお前がかわいいよ。想いが、正しく伝わるように。

「あまりに愛らしく煽るから、今の私では誤って傷付けかねない。痛みなく、蕩けそうな心地好さだけをお前には感じて欲しいのさ」

はじめて使う器具に、頼りない理性の糸。考えたくもないが、恋人に無体を強いる可能性はゼロではない。何事にも正しい準備と知識は必要不可欠。ダイゴの了承を得られたのなら焦らなくても構わないのだ。ひとつずつ、着実に試していけばいいだけのこと。

頭の中で段取りを組み立て、銀灰をシーツの海に沈める。

「嗚呼、けれど楽しみだな。鋼の男がどんな反応を魅せてくれるのか……待ち遠しいよ、ダイゴ」

「……勿体ぶる男め。お前好みに仕上がるかは約束できないぞ、ミクリ」

「ご心配なく。原石を磨きあげるコンテストマスターの手腕はよく知っているだろう？」

じゃれあい、素肌へ触れるうち緊張は解けていった。互いに熱を擦りあって吐き出し、緩やかに訪れる微睡みに意識を委ねる。

こうして、ふたりの淫らなオモチャ遊びの日々は幕を開けたのだ。

—ひとつめの夜—

最初の機会は、あの夜からきっかけ一週間後にやってきた。

とっ、とくっ、せわしくはねる鼓動にふれて、ダイゴの長い睫毛が震える。うなじに張りつく毛先より滴る零は、細く締まった裸体のラインをことさら強調するよう滑り落ちた。

静穏漂うバスルーム。生唾飲み込む光景を観測する者は残念ながらいない。唯一その資格を持つ男は、これから愛の巣となる場所で我慢強く番を待っている。

(ある程度『予習』はしたが、結局イメージは掴めなかった……ミクリを落胆させずに済むだろうか……?)

冒険好きなダンバルがベッドの隙間に潜り込み、隠されていた箱をひっくり返したとき。悲鳴を上げたミクリによって卑猥な品々は瞬く間に取り上げられてしまったが、元より優れた頭脳はそれらの特徴をしっかり記憶した。

使用される側の心構えとして一通りの器具を調べたものの、情報として理解はしてもどうにも己と結び付かない。チャンピオンとして、デボンの御曹司として自己研鑽に励み続けた結果、恋愛事を疎かにしたツケが思わぬ形で牙を剥いていた。

己をまるごと相手に明け渡すような行為は知らない。我を忘れるほどの衝動に身を任せることへの忌避感。愛しい男に触れられているというのに強張ってしまう悪循環を断ち切りたかった。

「……怖じ気ついている場合ではないな。あまりお預けしていたらここまで様子を見にきそうだ」

ミクリがそわそわと肩を揺らす姿が浮かぶ。ポチエナの如き愛嬌に緊張も少しばかり和らいで、やっと外に踏み出す勇気がわいた。

「長風呂だったね。大丈夫かい、ダイゴ」

「……ああ。もちろんだ」

寝室にて。バスローブを羽織った全身を翡翠の眼差しが検分する。たったそれだけで熱を上げる己の耐性のなさに辟易しながらしかと頷いた。この期に及んで逃げ道を用意する甘さときたら、逆に腹も据わるというものだ。穏やかな浅瀬に搖蕩う行為はもう終わり。

「そう、か——おいで」

意思を汲んだミクリがゆるりと両腕を広げて。花に誘われる蝶にでもなったような夢見心地で歩む。

「っ、あ……」

「捕まえた。もう、逃がしてあげられないよ」

「ミクリ、ッ、んう……っ」

—セックスに苦手意識を持ちながらおかしな話だが、ダイゴはこの瞬間が一等好きだった。力強い腕に囲われ、男の膝上に導かれて、唇で愛を食むひととき。

色孕む吐息が薄い皮膚を撫でる。ノックで伺いをたてる舌先を迎え入れ、するりと上顎をなぶる熱に腰が震えた。

「ん、む…つう、ン、んー……ッ」

「ちゅ、ん……っ」

丹念なキスに思考が溶け始める。咥内のザラつく場所を責められると全身が脱力してしまう。たっぷり気持ち良くなったあと舌の根をつかれると乞われるまま差し出すしかない。

くち、くちゅっ。互いの舌が、唾液が絡む水音がダイレクトに響く。脳髄を直接混ぜられるような陶酔に眦が滲んだ。

「は、う……ッ」

こうしていると、ミクリのものになったのだと実感できる。自分でも呆れてしまうくらいかたくなな肢体を、もっと彼の好きにしてほしかった。

「ん、ん……っ！み、うり……ッ、はや、く……っ」

「…っ…おまえが焦れるなんて珍しい。心待ちにして、かわいいな」

息継ぎの合間に胸を叩いて先を促す。喜びを隠そうともしないテノールに唇へ軽く噛みついで抗議すれば、悪かったよと口づけの雨が降った。ついでに顎の下を指先でこちょこちょされる。まるで気難しいネコ科の扱いだ。むすりとミクリの一挙一動を注視する。すると。

「確か……ローター、だったか？」

「………ダイゴの口からアダルトグッズの名を聞くと、途轍もない背徳を感じるね」

「む。成人した男に失礼極まりないぞ」

小さな球体が宙に揺れる。もちろん此度の件がなければソレを知らずにいただろう点はおくびにも出さず、つるりとした桃色に手を伸ばした。

なるほど、用途に無知であれば使用方法に首を傾げたことだろう。こどものおもちゃにしては遊び心もデザイン性もなく、マッサージ器具にしては小型すぎる。細いコードでリモコンと繋がった、ただ振動するだけのオモチャ。

「本当にこんなモノでなにか変わるのが……？ん、ミクリ？」

「いや、スマナイ。しっぽにじゃれるエネコのようで」

髪を数度優しく梳いて、涼やかな美貌が微笑む。慈愛に満ちて穏やかであるのに、翡翠の水面には激しい情欲が波打っていた。

「ふふ。興奮したか？」

「ああ、隅々まで愛でたいくらいにね」

導かれるままシーツの海に背中を沈める。合わせの隙間から忍び込む手のひらに鼓動は忙しく高鳴った。汗ばむ素肌の感触を楽しみ、胸の尖りをきゅっと摘まむ悪戯な指先に呼吸が弾む。すこし、こそばゆい。男にとって無意味な部位の愛撫もミクリはけして疎かにしない。だからと言って、都合よく感度が上がるという結果には今のところ至っていないが。

それは後ろも同じこと。前立腺は慣れれば女性のように悦を得るらしい。残念ながらダイゴには無縁であった。何度か探られた直腸は、内臓を押し上げる吐き気ばかりをもたらしたものだ。

「——ダイゴ、大丈夫だ。気負わないで、私に身を任せてくれ」

「ッ！」

「『きもちよくならなければいけない』なんて考えなくていいんだよ。お前の感覚を大切しよう」

ちう。あまく唇を吸われて強張りかけたカラダが解ける。小鳥の口づけが頬を、首筋を辿って。とうとう乳首をやわく啄み、軟体が絡みついた。

「あ、ん……っ」

強い刺激を与えるためというより、唾液で滑りを良くするために舌が往復する。ぬるぬる、ぬるぬると執拗に。

「ふ、ッ、う……っ。……？ っあ！ うあ、あッ！」

ながい口淫から解放されて息を吐いた瞬間、新たな刺激が胸を貫いた。ヴヴヴヴ……ッ。連続する振動がちっぽけな肉粒を襲う。十分濡らされた皮膚が摩擦による痛みを訴えることはないが、かわりに湧き上るのは鈍い痺れであった。

ローターだ。慌てて視線をやった先、己の平らな胸には不釣り合いな光景に羞恥を煽られる。

「お前の乳首は綺麗なピンク色だから映えるね。ほら、刺激でぷっくり固くなってきた」

「い、言わなくていい……っ」

「ダメだよ、そんな可憐に恥じらわれたらもっといじめたくなる」

「ひゃ、あっ、んん……ッ」

てらてらぬめりを帯びた突起を根元から震わせるオモチャ。ダイゴの反応をつぶさに観察する恋人の眼差しはぎらついて、頭から喰われてしまいそうな錯覚を誘発した。

咄嗟の制止も逆効果、まだ縮こまっていた片側の乳首も笑みを刻む唇に含まれて、舌先に捏ねくられる。

「ン、あ……っ、ふあッ、あっ」

微弱な振動と侮っていたが、大きな間違いだと知る。皮膚を、神経を、骨を伝って増幅する電流はやがて肚に渦巻いて、未知の感覚だ。紛れもない快楽の芽だと、このときは気付かなかった。

ローターは強弱をつけながら揉みほぐしていく。淡い乳輪に沿ってなぞってみたり、すっかり勃起した乳首を指と挟み撃ちに潰してみたり。唾液で艶かしくコーティングされた乳頭を集中的に捏ね回されたときには、頭の中で火花が弾けた。

「く、ふっ……！ や、あ、あ……ッ！」

「……気付いてるかい？ 前、勃っているよ」

「っ!? あ……っ」

指摘されて、はじめて変化を自覚する。緩く下着を押し上げるペニスはすでに先走りすら滲ませていた。

「なあ、ダイゴ」

もはや着衣の用をなさないバスローブと下着が取りあげられる。ボディソープの甘い香り立ち上る裸体にミクリが緻密に眼を眇めた。

「ここにもローターをあてたら、さぞ悦いだろうな」

「…っそ、れは……」

高揚から掠れたテノールは蠱惑に満ち、淫らな妄想を掻き立てる魔力を帯びて。性感帯でもない胸ですら妙な気持ちになったのだ。男の快感に直結する性器を責められたらどうなってしまうのか。無意識に喉が鳴る。

数十秒、拒絶が飛ばないのを確認して水のプリンスは華やかに微笑んだ。覆い被さる長身は堅牢な檻にも似て。

にちゅ…っ。カウパーを掬い竿に塗り広げる音がいやらしく鼓膜に届いた。

「あ、あっ……ふあ、あ……ッ！」

えもいわれぬ法悦が下肢を襲う。弱にスイッチを入れたオモチャが敏感なカリ首を撫で、輪を形作った五指が陰茎を包み上下に扱く。快楽の下火でくつくつと煮込まれているようだ。さらなる悦びを貪ろうとはしたなく左右に開きそうになる膝がガクガクと痙攣した。

(う、う……♡ぶるぶる震えて、きもち、イイ……っ)

容赦なく揺さぶられる性感に甘い声が止められない。とろとろ溢れる先走りが潤滑剤の役割を果たし閉じた膣までを濡らす。

イきたい。もっと強く、もっと激しくされたい。ミクリの手で、いやらしいオモチャで、滅茶苦茶にされたい。

「——ツツ!?♡あ、♡い、あああああッ！♡♡」

そんな、淫蕩に塗れた思考を見透かすタイミング。電撃が脊椎を貫くが如き快電流に、悲鳴染みた嬌声が寝室の空気を裂いた。

「ア、ああッ！♡ミク、リッ♡や、め…っ、ツツ♡♡」

「ふふっ、先っぽ好きだろう？我慢せず、いつでもイッていいからね」

充血した亀頭に張りつく卵型が惨いほどの快感をもたらす。刺激を逃がそうにもペニスとローターと一緒に手のひらで包み込まれれば、身悶えとともに躊躇を受け入れる他ない。

白濁混じりのカウパーがぐちゃぐちゃ下品な水音を断続的に奏でて、聴覚からも脳を犯す。射精に向けてくぱ♡くぱ♡と開閉を繰り返す鈴口を強力な振動でほじくられ、歓喜にだらしなく緩む唇から唾液が伝い落ちた。

「あ、い、でる、でちゃ……ッ！♡」

内腿の痙攣が止まらなくなる。腰が浮いて、今自分がどんな無様を晒しているかもわからない。朧な視界に海色が揺れた。荒れ狂う波がそこに在った。

「ア、あ、あ——～～ツツ！♡♡♡」

抗いようもなく、オーガズムに没される。足指を丸めて、喉を反らし、瞼の裏は白濁に染まった。同じ色がローターに引っ掛けながら下腹を汚す。粘度の高い液体が幹を垂れる感覚すらも達した身体には辛かった。機械はもう沈黙しているのに、まだ振動責めが続いているようだ。吐精の余韻に浸る亀頭がジンジン痺れて落ち着かない。

「……つ♡ん、う……♡みくり…♡」

「うん、いい子だ……全部出してしまおうな」

尿道に残る精液もすべて搾ろうとする手淫に蕩け、シーツに縋った両手も弛緩していく。ペニスを可愛がる動きはそのまま、ミクリの左手が肌を滑った。ひくつく後孔ではなく、その少し上。つるつるした皮膚の部分、会陰を捉えた指先は暫し緩慢に撫でさする。

「……？な、に……」

「ここも丁寧に開発すれば感じられるようになるそうだ。ダイゴが嫌でなければ、後ろと一緒に触れていきたが……」

「……ん。問題、ない。おまえの好きにしてくれ」

恥部をさらけ出す羞恥を宥め、自ら脚を左右に広げた。

「ありがとう。ゆっくり、ほぐしていこうな」

綻ぶ笑顔が近付き、深く唇が重なる。

ミクリの宣言通りその後はスローセックスに終始した。会陰と後孔を指とローターで弄り、挿入はなし。苦しそうに張りつめた男のペニスは口で奉仕し眠りにつく。不完全燃焼ともとれる流れだが、不思議と焦燥に苛まれることもない。

(……なんだか、体の奥が疼く、ような)

ダイゴの深奥に淫蕩の種を植え付けて、夜は静かに更けていった。

ふたつめの夜



扫描全能王 创建

「ん、ぐ……つ、ふ、うう……ツ」

「んあツ！あ……つ」

「うん。ローターはおしまいにしよう。よく頑張ったね、

「ダイゴ」

白い裸体がシーツの波間に泳ぐ。意思の強い琥珀は瞼に姿を隠し、透明な涙で光を散らす睫毛が僅く震えた。淫らでありながら、花弁に滴る朝露が如き清廉さを想起させる光景だった。

(……先に進めるなら、そろそろか)

仰向けに横たわる青年の、まろい双丘のあわい。ひくつく蓄からピンクのコードが伸びる。手元のリモコンに繋がるソレは、かれこれ十数分に渡って狭隘な粘膜を振動で柔らかく解していた。塗り込んだローションが搅拌される水音は卑猥極まりない。

——初めてローターを使った日から数えて三度目の逢瀬である。その間行為は本番に至ることなく、ひたすら

「ぬぷふ……つ。ゆっくり、ゆっくり、コードを引けば小さな卵が腸壁を捲り顔を出す。排泄染みた刺激に跳ねる細腰を手のひらで宥め、ダイゴの表情を注意深く観察した。

快楽と名付けるにはいまだ物足りないカラダの内側への戸惑い。性玩具で責められる被虐を伴つた精神的な悦び。噛み合わない歯車にもどかしく眉根を寄せ、緩く頭をもたげる性器を持て余す。

前立腺に芽生えつつある性感を『むず痒い』と評するう

ぶな男の変化に、ミクリは手応えを感じていた。

「う、ミクリ……も、う、つら……い……！」

「う、ミクリ……も、う、つら……い……！」

「謝ることではないさ。大丈夫、何も感じていないのと

ものではなかろう。

「違うんだから——今日はね、コレを使おうと思う」



言つて、サイドテーブルから目当てを引き寄せる。表面が計算された凹凸に波打つ形状。効率良くナルをマッサージする機能に特化したプラスチック製品に潤滑剤を纏わせるのを、好奇心を溶かした蜂蜜色が興味深く眺める。

「それは……」

「エネマグラだよ。今のお前になら挿れても苦しくはない、筈だが……怖くはないか？」

視線を合わせた問い掛けに銀灰の恋人はぎこちなく頷く。

照れ隠しで枕に埋もれる横顔は搔き抱きたくなる愛しさであった。

「おまえがもたらすものなら、恐ろしくはない」

「……ダイゴ」

胸にあたたかな火が灯る。信頼に、それ以上のものを返したい。鋼の理性が蕩けるほどにかわいがってやりたい。

恥じらいに伏せる眦に口付け、後孔に器具をあてがう。

挿入はスムーズだった。あらかじめ指とローターとでたっぷり準備した肉襞は、エネマグラのヘッド部分を難なくのみ込んだ。

ひく、投げ出された足が引き攣る。小さめのサイズを購入したが、それでもさつきまでのオモチャより質量は上。異物感はいがんともし難いのだろう。

「ぐ……ツ、ン、う……っ」

「ダイゴ、こちらを向いて。キスしよう」「あ……っ。は、あ……ツ」

薄い唇を噛んで傷つけてしまう前に、バードキスで意識を自分に誘導した。ダイゴは秘めているつもりかもしれないが、彼はキスが好きだ。表層を舌先で訪おとなえばおずおずと秘奥を許す。整った歯並びをなぞって、頬肉を悪戯に擦り、期待を高めてから敏感に過ぎる上顎を擦り立て。

「んっ！んっ……ツ、う♡」

抱き締める身体がたちまち官能に溺れるのが伝わる。咥



内の天井を尖らせた舌でしつこいくらい嬲る動きに弱いらしい。溢れる唾液を喉奥に導けば、こくこくと懸命に飲み下す様が健気だった。舌の根をつづいてさらなる蜜月を誘う。従順に差し出されるダイゴの舌を味わうキスは、まるで口で楽しむセックスのよう。

「～～～っ♡ちゅ、っ……あ、む……♡」

立ち上る汗の匂いに一層煽られる。瞼を閉じて夢中になる麗顔を愛で、素肌にも愛撫の手を伸ばした。あえて性器には直接触れず、脇腹から際どいラインを辿って胸を柔らかく揉みしだく。以前より感度を増した乳首はいじめてほしいとねだるみたいに、ツンとしこつて存在を主張していた。

こりつ♡くりくり♡左右の果実を摘まみ引っ搔き捏ねくれば、重ねた唇の隙間から甘ったるい吐息が漏れる。だが、響きに混じる微かな困惑は見過ごせるものではなかつた。

「ダイゴ、どうした？」

「……っ♡は、あ……っ……いま、うしろ、が……」

口付けを解いて様子を窺う。ダイゴ自身も己の異変に思考が追いつかないようで、下腹に落とす眼差しは頬りなぐ揺れた。

「形容、しがたい……押されている場所が、痺れ、て……？」

「吐いて……」

「う、……ふ、う……」

エネマグラは激しく挿抜する性具ではない。筋肉の収縮を利用して前立腺を圧迫する効果が発揮されはじめたのだ。素直に呼吸を繰り返す青年の総身がじわりじわりと恍惚に浸される。

「う、あ……っ！ふ、っ♡あ、あ……」

吸って、吐いて。吸って、吐いて。たったそれだけの動作にも関わらず、ミクリの眼前で淫蕩の花が咲こうとした。



ていた。半端な勃起だった色素の薄いペニスが腹につくほど反り返り、蜜の玉を先端に結ぶ。プラスチックの突起に会陰と直腸から胡桃大のしこりを捉えられた秘所は、快感を咀嚼するかの如く妖しく蠢いて。

男の絶頂とは根本から異なるメスの悦びが、ダイゴの快樂中枢に根差そうと胎動する。

「ひツー・♥おなか、ぐりぐりって……ら、え……つ♥」

「ふふっ、きもちよくなってきたね。私も手伝ってあげるから、このままイッてみようか」

「あ、あ……ツ♥ううつ、あ……ツツ♥」

なだらかな腹部を探り指先で押し込むと、青年の表情が切羽詰まった色を帯びる。シーツをもがく足指が丸まり開いたりと忙しない。無意識に刺激を逃がそうとする抵抗はしかし、前立腺を舐めしゃぶるマッサージ器に対しては意味がなかった。

「ふああツ♥あ♥ク、る……つ♥へんなの、きちやう……ミクリ……つ、み、くり……ツ！」

溺れる手のひらに抱擁で応える。閉じ込めた腕の中で、若い肢体の断末魔にも似た痙攣をまざまざと感じた。

「あつ♥あ、ああああツツ！♥♥♥」

ぴゅ、ぴゅるるつ。緩んだ蛇口みたいに勢いの弱い射精がふたりの腹を濡らす。アナルの快感のみでガクガク腰を震わせる恥態に、狂暴な肉欲が肚底で滾った。

あのダイゴが、可愛い恋人が、とうとう後ろで悦びを孕んだのだ。半開きの唇から惚けた嬌声を零し、取り繕う余裕も忘れて余韻に浸り。待ち兼ねた開発の結実に、脳が沸騰するような興奮を覚える。

「ダイゴ……つ……は、ツ、ダイゴ……」

「んう……♥つ♥つつ♥み、う……♥」

小さな舌をのぞかせた花唇に食らいつく。甘い唾液を啜り、性急にスラックスを寬げ、痛いほど張りつめた男根を抱えた太腿に擦りつけた。獣のマーキングと変わらぬ



蛮行だが、渴く暇ない琥珀が再び劣情に潤む。

びやしない。

「ま、まつて、くれ……♡また、つ……またくる♡や、ひうつ
♡なか、えぐられ、て……ツ♡♡」

(しかたないだらう……、初夜みたいなものなのだから…
ツ!)

「ツ、いくって言つてごらん……。お尻でいくって、愛

らしく啼いておくれ、ダイゴ……!」

「う、う……つ♡い、く……ツ、いく、いくつ♡お、し
り、ごりって、されて♡ア、いつちや、イクうう……」

「ツツツツ♡♡♡」

二度目の絶頂はより深く、より激しく鋼の貴公子を絡め
取つた。

誰にともなく言い訳し、慎ましやかな薔を独占する器具
に手をかける。最初は指一本でも青ざめていたダイゴへ
無理強いなどできる訳もなく。可能な限り苦痛を排除し
て本番に臨むこのときをどれほど待つたか。

くふ……つ。襞を搔き撫でてエネマグラを抜く動きが乱
暴にならぬよう全神経を使う。こめかみを伝うぬるい汗
が、眼下の肌に跳ね返つた。

きゅ♡きゅう♡歓喜に咽ぶ肉輪がエネマグラに媚びる蠕
動は外から見てもあからさまだ。ドライオーガズムに至つ
た青年の蕩け顔から目が離せない。突き出す舌からたら
りと溢れる涎が淫らで、糸引くそれを目の当たりにした

瞬間理性の輻（ひき）の外れる音がした。

コンドームの袋を歯で破り捨て、逸る心持ちで装着する。

小刻みに震える指の情けなさときたら。童貞もあるま
いに、想い人と繋がる緊張で気の利いた台詞ひとつ浮か

「——きてくれ、ミクリ」

いいか、と。上擦る声で許しを乞う前に、ふと視界が陰
る。



いまなら、へいきだから。舌足らずに囁いて、銀灰の青年は美しく微笑んだ。ミクリを安心させるため余力を注ぎ込んだのだろう。引き寄せた腕で掠めるキスを仕掛けたダイゴは、それきりスプリングに背を預け全身を脱力させた。

——お前の望む通りに。明け渡された主導権は、愛情の重さと同等だ。ハウエンの頂点に君臨することに慣れ、誰かに寄り掛かるのが致命的に下手になつた男。地方を、世界を襲つた争乱を経て結ばれた縁に感謝する。

ダイゴが愛おしい。いくつもの傷を隠す彼を、支え、癒してやりたいのだ。

「……ああ、愛しているよ、ダイゴ」

収縮するふちに切つ先を食ませる。吸いつく粘膜の温かさに迎えられ、そして。

「——ツツ！う、つ、あ……つ！」
「は、あ……ツ！く、う……！」

ずぶずぶと肉竿を沈めていった。オモチャとは比較にならない圧迫感に見開く眼から大粒の真珠がはらはら落ちる。舌先で掬い、無数の口付けで宥めてあやして、壊れそうな瘦躯を大切に抱いた。

半ばまで腰を進め、浅い場所をゆるゆる確かめる。ぬかるむ腸壁の一点。前戯で腫れた肉芽を亀頭で潰した瞬間、耳に心地好い嬌声が褥に転がった。

「ああああっ♡そこ……っ♡」

とちゅつ♡ごりゅ♡丁寧に丁寧に、前立腺へ奉仕する。うねり狂う襞の蠢きが膜を隔てても顯著だ。堪らない、もつとして。雄に甘える穴の具合の良さに歯噛みする。ゴムをしていなかつたら危ないところだった。三擦り半なんて台無しだ。

下肢にわだかまる欲望をやり過ごし、あまりの快樂に浮き上がつたダイゴの臀部を鷲掴む。柔らかな肉を中心寄せながら内壁をぞりぞりこそげると、ペニスに屈服したアナルが絶頂に痙攣した。



「お、ツツツ♥♥あ♥あ～～つっ♥」

「ぐ……つ！ 食い千切られそうな、締め付け、だなつ！」

「あうつ♥い、ま…つ…イッて、いってる♥みくり♥ア

♥あー……ツ！♥♥」

「いいよ……たくさんイッて、溺れてしまえ、ダイゴ……

」

真っ赤な耳朶を唇で挟み鼓膜に塗りつけるよう媚毒を吹き込む。ミクリとのセックスに耽溺させるため。ミクリという男の前でだけ、ツワブキダイゴがだめになつてしまえるように。

「あ！ いあツ♥みく、り…ついい、きもち…♥しこり、つぶすの…すごい…つ♥♥ああツ♥♥♥」

時間をかけて搔き回し、隘路を抉つて恍惚を刻む。ラテックスの膜に子種を吐き出すまで、ダイゴは知つたばかりのメスイキをたっぷりその身で味わつた。

事後、荒い呼吸にも構わずキスを繰り返すふたりは擦つたげに笑みを交わす。夜の営みに悩んでいた名残すら見当たらない、心から満ちた夜であつた。



み
つ
つ
め
の
夜



扫描全能王 创建

ノックを二回。中からの返事を待ち、室内へと身を滑らせる。

「失礼します——父さん」

「おお、ダイゴ。カロスへの調査ご苦労……あちらはどうだった？」

デボンコープレーション本社、社長室。鉱物のコレクションケースを通り過ぎ、重厚なデスクの前で立ち止まる。ホウエンの地を踏むのは一ヶ月ぶりだった。父の表情には険しさが滲んでいる。鏡写しのように、己も同じ顔をしていることだろう。

「アサメをはじめとして復興は進んでいるけれど、しばらく注視すべきだね。フレア団——メガシンカもポケモンの生体エネルギーも利用し尽くして、深い傷痕だけを残していくた……」

それというのも、カロスを襲った未曾有の危機が原因であつた。巧みな情報統制により他所ではほとんど話題に

ならないが、伝説のポケモンと古代兵器を巡る戦いが彼の地にて終息したのはつい最近のことだ。

己とてマスター塔にて教えを乞うた師・コンコンブルとの縁がなければ詳細を知るのはもつと後になつたかもしれない。破壊された塔の無残な姿は、鮮明に焼き付いている。

「ふむ……お前にメガシンカを受けたコンコンブル殿が無事だったのは幸いだな。負傷の報せは肝が冷えたが、結果として貴重な人材は失われずに済んだ」

「そうだね。一度は狙われたディアンシーも優れたトレーナーによって守られた……けれど」

「ん？」

「……予想以上にあちらの上層部は腐敗している」

ピンと空気が張り詰めるのを肌で感じた。だが、此度の件で寄付、出資の話を進めてきた立場での偽らざる所感である。

根が深い、と言わざるをえない。過去ホウエンで起きた事件も、アクア団のリーダーがメディアを掌握し都合良



く情報操作が行われたが、それに類する……いや、さら
に上回る悪辣さが蠢いていた。

マスメディアどころか司法や有名企業にも歪んだ選民思
想が垣間見える。四天王に裏切り者が潜り込んでいた辺
りからして頭の痛い問題だった。元チャンピオン、デボ
ンの関係者としては反面教師とするところが多い。

「捜査の手を免れた構成員はあちこちに散らばっている。
離れた地であるとしても、警戒に越したことはないと思
う……彼らにとつてデボンの研究もまた、魅力的なデー
タだろうから」

ムダンドイ
∞ エネルギー。ポケモンの負担を考えれば取り扱い
には最大限注意しなければならないそれを悪用させる訳
にはいかない。

手元のアタッシュケースを提示する。中身は情報媒体と
いくつかの資料。必要と判断した要素をすべて集約した
結果だ。

「目を通しておいてくれ。抜けはないと思うけれど、父

さんの見解も聞きたいし」

「ああ。預かろう…………そうだ、久しぶりに夕食でもど
うだ？」

急な話題の転換に虚を突かれた。あえて気軽を装う誘い
には気遣いが滲んでいる。自分はそんなにも疲れた顔を
していただろうか。

それに、今夜は……。

「ええ、と……ごめん、今日は、」
「なんだ、先約か？……ははあ、さてはダイゴ。ようや
くお前にも好い人ができたか？」
「つちが、ゆ、友人との約束だよ！」

翡翠の影が脳裏をちらついたタイミングの揶揄に、言葉
が喉でつっかえる。失態だ。どう考へても動揺を隠せて
いない。

明らかな不審を目にした父はあんぐり口を開け、次第に
喜色満面といった笑みを浮かべた。



く情報操作が行われたが、それに類する……いや、さら
に上回る悪辣さが蠢いていた。

マスメディアどころか司法や有名企業にも歪んだ選民思

「さんの見解も聞きたいし」「ああ。預かろう…………そうだ、久しぶりに夕食でもどうだ?」

想が垣間見える。四天王に裏切り者が潜り込んでいた辺りからして頭の痛い問題だった。元チャンピオン、デボンの関係者としては反面教師とするところが多い。

急な話題の転換に虚を突かれた。あえて気軽を装う誘いには気遣いが滲んでいる。自分はそんなにも疲れた顔をしていただろうか。

「捜査の手を免れた構成員はあちこちに散らばっている。

離れた地であるとしても、舊形は起したことはないと思
う……彼らにとつてデボンの研究もまた、魅力的なデー
タだろうから」

ムグンダイ
∞ エネルギー。ポケモンの負担を考えれば取り扱い

にはいかない。

手元のアタッシュケースを提示する。中身は情報媒体といくつかの資料。必要と判断した要素をすべて集約した結果だ。

翡翠の影が脳裏をちらついたタイミングの揶揄に、言葉が喉でつつかえる。失態だ。どう考えても動揺を隠せていない。

「目を通してくれる。抜けはないと思うけれど、父



「冗談のつもりだつたが、そうか！ 石とポケモンにしか情熱を傾けなかつたお前がなあ。子供の成長は早いとい

デスクの上で手を組み合わせ、親の顔でツワブキ・ムク
ゲは鷹揚に頷く。

「ま、待ってくれ。しみじみ頷く

「ま、待つてくれ。しみじみ頷かないでくれ……違うこ
てば！」

「ははは、照れるな照れるな。心配せずともお前の選んだ相手ならば口出しせんよ」

皺を刻んだ日元がたわむ。愛情を湛えた光に、拙い否定
が尻窄みと消えた。

ミクリとの関係をいつか告白するにしても、心の準備が出来るまでは事実をひた隠さなければならない。

後ろめたい気持ちを、大丈夫なのだと宥められた気がした。幼い頃、大きな掌で頭を撫でてもらつたときみたいに。

「超古代。ポケモン復活の際も、隕石墜落の際も、力持つ

てきたが……ダイゴ、お前の人生だ』

揶揄の混じった思い出話に今度こそ全身の血流が沸騰す

が
……

懐古の眼差しは、喪われた女性を想つてのものか。病に倒れた母の記憶を残念ながらダイゴは共有できない。物心つく前の、永遠の別離であつた。

言葉を探しあぐねて口ごもる。すると、パツとユーモアの色を取り戻した父が大仰に肩を竦めてみせた。

「まあ、本物の石と結婚したい、なんて明かされたらさすがに度肝を抜かれるかもしけんがね。覚えているか？」



る。しんみりした空気が打ち払われ、下手をすれば幼年期から少年期の恥を語り始めそうな雰囲気だった。

「とにかくデータは渡したから！僕は、これで、失礼します！」

強引に会話を切り上げ、追撃から逃れるように踵を返す。憂いを若干払拭してくれたのはありがたいが反応で遊ばれるのは御免だ。

視覚に難はあると馴れた場所。危うげなく応接用ソファとインテリアの間を抜けて――。

「ああ――水の石で思い出したが、ミクリくんによろしく伝えておいてくれ。新しくリリースしたポケモンケア用品を彼が愛用しているおかげで、良い宣伝になつたようだ」

「う、う、う……ッ!?」

目測を誤った。開きかけたドアで強打した肩が鈍痛を訴える。よもやすべてを知った上でからかわれているので

はあるまい。

羞恥で熱くなる頬で、最後に室内へ一礼する。お前が失敗するなんて珍しい、と苦笑する声にそれ以上の含みはない。

キュウコンに化かされたような気持ちで、ダイゴは社長室を後にするのだった。



「……だから、肩はその時ぶつけただけだ」

昼間の顛末を洗いざらい吐き終わり、溜息。押し寄せる疲労は重く、まるで体の中身が鉛にすり替わったみたいだ。

明るさを絞ったルームランプに照らされた恋人――ミクリの表情は安堵と困惑を織り交ぜた色彩に染まっている。それはそうだ。己とて出来事の一つだつて消化できていない。思考が散らばって、熱暴走を起こしそうだった。



「……そうか。いや、事件性のある怪我ではなくて良かつたが、あの人も底が知れないな」

夕食もシャワーも終え、ベッドで語らう安息のひととき。前戯にも満たない軽やかなスキンシップの最中、うっかり拵えた青痣を発見されたのに端を発すミクリの誤解が解けたのは幸いであった。労りに満ちた指先が、剥き出しの肩を撫でる。

「いざれ挨拶に伺わなければと思っていたけれど……ふむ、なにか度肝を抜く演出を練つておくべきかな」「どこに対抗心を燃やしているんだ…？確かにおやじの驚く姿なら、僕も興味はあるが」

スプリングの上に押し倒されて軽口と口付けの応酬を重ねる。先を急がない愛撫には、ダイゴがうまく脱げずに入り心の鎧を外してやろうという優しさを感じずにはいられない。

たつた一ヶ月ではあるが、悪意の坩堝に踏み込んだ時間はそれだけ理性の仮面と皮膚の境目を曖昧にしてしまつ

た。元より思索を巡らせれば没頭する性分である。神秘抱くルネの空気を吸つてなお嫌な緊張が抜けないのは、無意識下ですら遠い地に心奪われているからだ。

美しいカロス地方。自分に、トレーナーとポケモンの新たな可能性を見させてくれた。だからこそ、数年前のホウエンを彷彿とさせる争いの舞台となつたことが悲しい。

「——ダイゴ、疲れているね」

「あ……っ、すまない。少し、呆けていたようだ」「いいや、ずっと気を張っていたのだから当然さ」

直截な指摘に心臓が跳ねた。慕わしい相手を前にして不誠実ではないかと、脂汗すら浮かぶ。しかし、強張りを見透かす翡翠は責めるでもなく静けさを保つていた。

「少し待つっていてくれ。良いコトを思いついた」

今日はやめておこうか、と切り出されずに済んでホッとした、なんて。

はしたない考えは表情に少しでも滲まなかつただろうか。



扫描全能王 创建

倦怠感は確実に心身を蝕んでいたが、だからこそミクリのぬくもりが欲しかった。丹念に彼の愛情に慣らされた結果でもあった。

広いベッドに取り残されると、途端に心許なさに襲われる。身の置き場に困つてとりあえずシャツを羽織ろうと拾い上げたところで、意外に早く舞い戻った恋人の手元に首を傾げた。

「吸水シート？ ミクリ、いったい……？」

「これを敷かないとシーツが大惨事になつてしまふからね。では服を全部脱いで、そつちの椅子に掛けてくれ」

「う、わ、わかった」

頭の中を疑問で満たしつつ、ミクリに促されるまま行動に移す。背後で褥を整える男を気にしながら着衣を自ら脱ぎ捨てるのは覚悟を必要とした。

何をするにもそつのない色男のリードなしで、抱かれるための準備をする。縛れる指先がもどかしく、正常な思考が茹だる気配がした。

「ダイゴ」

熱を帯びた声が、眼差しが、素肌を炙る。

「おいで」

人魚^{セイレーン}に惑わされる者は、こんな風に魅了されるのかもしれない。甘やかな招きには逆らいがたい響きがあった。人魚伝説など所詮、ジュゴンやアシレーヌといった一部のポケモンを昔の人が曲解した末の与太話に過ぎない。論理的思考が導く分析はもつともだが、ミクリという男を前にすると迷信も真実味を帯びるのであつた。

一糸纏わぬ姿で、覚束ない足取りで、たつた数歩の距離を埋める。すぐに力強い腕が伸びてきて、唇で密な逢瀬を果たした。

「ん、ん……っ」

咥内をいっぱいにする舌に陶然と応えていると、支えられた身体がベッドの上に導かれる。大型の水タイプ等を



室内でも手入れ可能にする吸水シートは肌触り柔らかくダイゴを迎えた。

「う……？」

「思慮深いのはお前の長所だけどね、考え過ぎるのも毒になる。一度、頭を空っぽにしておこうか」

そう微笑んだミクリは、いつも使うローションとは異なるボトルを傾けた。粘性の液体が糸を引いて胸へと滴る。

仄かな花の香り。ぬるい温度と相俟つて、セックスというよりマッサージの始まりを思わせる。

「ミクリ、つ、あ、あ……」

「ふふっ。私が癒してあげようね、ダイゴ」

ぬちや……つ。大きな手のひらが円を描いてローション

を塗り広げる感触に、ゾクゾクと背骨を痺れが這い上がる。外気に触れてぷくりと尖った乳首ごと胸筋を揉みしだかれるのは、倒錯を伴う快楽を呼び起こした。

女性の豊満さには程遠い。けれど意識して鍛えている男

の頑強さとも違う。非力ではないが、思うように筋肉のつかない体質が密かなコンプレックスであるダイゴの瘦躯を、ミクリは心から慈しみ愛でていた。

「ふ、あっ！ あ、あ……」

「あちこち凝っているし、足もむくんでいる。リンパを流していくか」

耳の下を優しく撫でて鎖骨を辿り、腋から胸へ滑る指にほぐされて吐息が艶めく。さすが水のイリュージョニスト。手持ちだけでなく己を美しく磨くのに余念がない彼は、プロにも劣らぬ手際で青年の肢体を把握し整えていく。

ふわふわとした心地好さに意識が微睡み、血の巡りが良くなつた体が温まる。いや、不自然なくらい熱が宿るこの感覚は。

「は、んん……つ、ミ、クリ……ツローションに、なにを混ぜてる……？」

「おや、気付いたかい。安心しておくれ、怪しい媚薬成



分とかではないから。ただの温感ローションってやつさ

「温感……」

「そう。でもね、それだけの効果でも感じ方は違つてくるものだよ……例えば、こうやつて」

「あッ?! あ、あああっ♡」

腰が疼く。ペニスが緩く頭をもたげているのがわかる。
常なら胸への刺激は程々で許してくれるのに、今回に限つて男の指はちつとも退く様子がない。

「ミクリ……つも、それ、いやだ……したも、さわつてくれ……!」

くにゅくにゅつ♡熱を孕んだ突起を不意打ちで捏ねくられ、感じ入った嬌声がまろびでた。玩具で責められるのが当たり前になつたそこは、指による愛撫でもものはや十分に悦びを拾える。潤滑油を執拗に擦り込みながら摘まんだ指先でちゅこちゅこ上下に扱かれると、陶酔が胸の奥に渦巻いた。

このままでは醜態を晒してしまいそうで必死に懇願する。だが、返ってきた反応は予想を裏切るものだった。

「どうして? 胸だけでもひどく悦さそうだ。お前が乳首でイッてしまふところ、見たいな」「…、え……、む、りだ……つや、むり……♡」

「ね、きもちイイだろう?」「わかつ、たから……ひあつ♡ちくび、ばっかり……いツ♡」

とんでもない事を宣い、ミクリの指使いが激しさを増す。こりゅこりゅこりゅつ♡恥ずかしいくらい固く熟れた果実を高速で弾かれ、目の前がスペークした。誤魔化しきれない快感。自ら胸を突き出して、荒々しい責めをねだつてしまふ。体の深くから迫る衝動がこわいのに、好いた男の手で強引に上り詰める事実が絶頂を後押しした。



「は、あつ♡だめだ、くるつ♡くる、つ、～～～ツツ♡
♡」

足指を丸めてメスイキに浸る。上から覆い被さる恋人の
せいで身悶えも出来ず、小さな肉粒から生まれる法悦の
波に溺れるしかない。

(つ♡イッた、のに……つ♡)

達したのに、射精には至れなかつた下腹が熱くて苦し
かつた。重たい欲がわだかまつて、鼓動が壊れそうに脈
打つ。もっと深くイきたい。身の裡で暴れる熱塊を解放
してほしい。

瞬きのたび落ちる零を、口唇が受け止めて。
震える内腿をいやらしく撫でる動きに操られ、しなやか
な足が開いていく。日頃の禁欲的な空氣も上品な振舞い
もかなぐり捨てた大股開きは、啼き喘ぐダイゴを蠱惑的
に演出した。雄ならば無条件に喰らいつきとなる光景
だ。

「良い子だ。可愛いよ、ダイゴ……上手にいけたご褒美
をあげなければね」
「……？ アッ♡うあ、あつ♡ひッ、あ、あーツツー♡
♡」

テノールが耳朶を犯すと同時に、淫猥な願いは叶えられ
た。ローションに塗れた五指が、先走り零す花芯をねつ
とり包み込む。そのまま搾精に向かう手淫を施されれば、
頭がピンク一色に染まるほどの快楽に飲まれた。

じゅぱじゅぱと濁った水音すらもどこか遠い。原始的な
欲求が理性の糸を引きちぎり、性に奔放になれと唆す。
あつい。あつい。きもちいい。裏筋も亀頭ももみくちゃ
にされて、腰の痙攣が止まらなくなる。

磨かれる淫乱の素質を本人だけが自覚せず、ウエット
オーガズムに駆け上がる瘦身が弓形にしなった。



「うあ、あ、あああああツツツ♥♥♥」

噎せかえる色香と精の匂い。生睡を飲むミクリに見つめられながら、白濁を放逐する悦びを噛み締める。溢れる精液が竿に垂れる刺激も、温感効果のせいかジンジンと疼く性器には辛かつた。意識が茫然たる海に揺蕩う。完全に脱力した全身も、ともすれば泥のような眠りに沈みそうに満たされていた。

打撲した肩を避け、肩甲骨から羽の名残をなぞる指が丁寧に指圧する。凝り固まつた筋肉が柔らかく解ける実感にうつとりと瞼を下ろした。悔られぬよう、付け入られぬよう。鉄壁と化した外殻がふやけて蕩けて跡形もなくなる。

肌を火照らせるぬるつく液体が、理知の歯車をも錆び付かせるようだつた。

「随分溜まつていたね。向こうでは抜かなかつたのかい？」

「……、う……っ」

「はは、聞こえていいかな」

世界を紗で隔てたみたいだ。恋人の落ち着いた聲音を子守唄にしていると、ころりと体勢が変わつた。ああ、うつ伏せにされたのか。緩慢に現状を把握しようとする思考が、再びとろ火にかけられる。

男の手が腰を掴めば、下腹の奥がにわかに騒めく。交合を期待した内臓の蠢き。あからさまな反応を抑え込もうと唇を噛んで、枕に強く顔を埋めた。

潤滑油の、甘い香りが鼻腔に残る。

「あつ！う、うー……ツ♥」

「きもちいいね、ダイゴ」

「ミク、ツ、ああっ♥」

「痛かつたら言つてくれ。無理はさせたくないからね」

「あ、あ……♥」

「ここもヒクヒクしてる……わかるだろう？」



ふくらはぎより脚の付け根を滑った手のひらが、とうとう双丘に辿り着く。引き締まつた肉を割り、秘めた蕾を指先で捏ねるミクリの声も興奮に掠れていた。雄の色気滴る囁きを吹き込まれては堪らない。

「ひ、ツ♡お、ア、あ～～ツツ♡♡」

ぬぷぶぶぶ…っ♡ローションを絡めた指が引っ掛けたりもなく媚肉を搔き撫でた瞬間に、思考回路は断絶した。焦れた襞が擦れる多幸感で唇がだらしのない笑みを象る。男の、爪まで整つた長い指。隘路に潜る三本の質量が容赦なく責め立てる。単に穴を広げる動きではない。己の雌が悦ぶ場所を熟知する、計算された性技だった。

止まないくちゅくちゅ音と臀部から沸き上がる法悦に脳まで侵される。メスイキを覚えたしこりは散々に弄くり回された。揃えた指先で舐めるように捏ねたと思えば、膨らみを挟んでゴリゴリ潰す。ローターを真似た小刻みな振動を送られては我慢などできるはずもなく、陰茎から透明な潮を吹いてイキ果てた。

感じ過ぎてつらい。これで催淫作用は含まれていないのだから信じられない。温感効果と、慣らされた快乐と、ミクリと交わる精神的な充足感。要素としてはそれだけのこと、ダイゴは完全に翻弄されていた。溺れきっていた。

「あ、うツツ♡♡イッ、っ♡い、つてる♡イッて……っ♡♡あ♡あーっ♡」

「あ、んつ♡あー……ツ♡♡とけ、う…っ♡とけちや：

「うん、ナカが私の指に甘えている……凄いうねりだね」「つつ♡あ、あ、まつて…くれ…♡ゆび、とめ、ツ、え、あ♡♡」

「ダメだよ。もっと大きなモノを咥えるんだから、ちゃんとマッサージしないと。なあ、ダイゴ」

「う、う～～…っつ♡♡♡♡」



♥♥

また、尻が震えて絶頂を味わう。前立腺をずりずり圧迫しつつ腹側の壁を擦り立てられ、口端を唾液が汚した。枕も吸水シートも酷い有り様だ。ローションと体液をべつたり吸って色を変えている。ベッドにしなだれ、瘦身を桃色に染め汗みずくになりながら、しかし行為は本番にすら至っていない。

「み、う…つ♥みく…ツ…あ、みくり…♥」

ミクリ。ミクリに抱かれたい。逞しい雄に貫かれて、内側を食い荒らされたいのだ。

「——ダイゴ」

一心に求める男の聲音が降る。縋る枕から振り仰いだ先、至近距離に身を乗り出した麗顔に胸が高鳴った。キスをするには苦しい体勢だが、捧げた舌先で唾液を遊ばせ、喉を潤す。

♥♥

「——ツツツ♥♥♥あ♥お、あーッ！♥あーッ♥

何処か嗜虐の潜む響きに問うより早く。答えが、ズブズブと挟隘な肉穴を貫いた。

待ち望んだ熱杭を覆うゴムの違和感。砲身をぐるりと囮むイボと、襞状の段差が連なつて。それで直腸をほじくられると——。

びり。袋を破く小さな音を鋭い聴覚が拾い上げた。知らず腹部が波打ち、腰がくねる。避妊具をつける仕草にすら、情欲を煽られるようになっていた。

「あ……♥」

「きっと、コレも気に入ると思うよ。……奥まで蕩けてしまおうね」

「？なに……、つ？♥や、あ、あ……つ♥」

一度のストロークで、ダイゴのキャパシティを越えた快感が溢れ出した。組み敷かれた身体が狂乱に悶えるが、上



からのし掛かる檻には敵わずただただ雌の幸福を享受する。

腫れたしこりを粒々が抉る感覺でイキ、アナルの縁を連續した段差がめくる衝撃でイッて。浅く速いピストンで両方の悦びを味わわされたら、極まつたまま戻ることもできない。

腹とベッドに挟まれたペニスからは、漏らすも同然に薄くなつた精子が垂れ流されていた。

「い、ッう♡お、あ♡いってる♡イッ、また、またイクッ♡♡♡」
「は、っ、ジョークグッズとは、バカにできない、だろう？お前はとくに、刺激に敏感だからな……ツ」

五感の一つを補う為の特性が、鋼鉄の青年をまさに追い詰める。きゅうきゅう肉棒を締め付けるほど生々しい形を感じ、脳内に快楽物質を飽和させる。

くちゅ♡ぐちゅ♡ぱちゅ♡ローションが泡立ち弾ける淫音がベッドルームに満ちた。甘く睦み合う行為にとろとろと眦が下がり、閉じれない口から濡れた舌が零れる。

法悦に碎けた腰は揺さぶられるに任せ左右に振れて、愛しい番に孕ませたがっていた。

「ふああ……っ♡きも、ち……ッ♡みくり、もつと♡ぼくの、なか……ずんずん、って……♡あ♡あうツ♡イ、あ、ああああ一ツツ♡♡♡」「あ、ぐ……ッう！ダイゴ……！」

肚の奥、行き止まりの天井を亀頭で可愛がられるともう駄目だ。無自覚に卑猥な言葉を口走り、臀部をミクリのペニスに押しつけるようにしてオーガズムを貪る。四肢の末端まで恍惚が支配し、コンドームの精液溜まりに吐精する男根の痙攣さえ甘イキに繋がった。

「……っ……は、あ♡♡はっ、う……♡」

弾む呼吸は醒めぬ余韻に囚われ、眼差しも紅茶に垂らしたハニーミツの如く溶けきつた。翡翠の愛を注がれ、ダイゴは無垢に微笑む。あらゆるしがらみや苦悩から守られ、やすらいだ表情であつた。



よ
つ
つ
め
の
夜



扫描全能王 创建

「ま、ダイゴくんが元気そうで良かつたぜ。時間があれば顔出せって伝えといてくれよ。久々にメガメタグロスと戦りてエんだ」

獰猛に口角を吊り上げるカゲツの言葉に不意を突かれた形で、ミクリは固まった。

サイユウシティ・チャンピオンリーグ控え室。シーズンオフではあるもののカロスの事件を受け、チャンピオンと四天王が一堂に会する場での発言であった。

「そ、れくらい自分で伝えればいいのに……連絡先は知つているんだろう？」

「そりゃあな。だがあの通り多忙なうえ、律儀だからな。電話しようもんなら無理してでも時間つくつちまう」

「そうそ、あちしたち、ダイゴくんの負担になりたいワケじゃないかんねー」

情報共有も終わったあと緩んだ空氣で、フヨウは足をぶらつかせた。プリムもゲンジも視線で同意を示し——そして、彼ら全員がキーストーンを身につけていた。

対になる稀少なメガストーン含め、過去ディアンシーをカロスに連れていった際のダイゴの土産だ。いつかお前の手持ちの子にもメガシンカの形が発見されれば良い、と思議な紋様を秘めた石はすでに己も受け取っている。上に立つ者として、惜しみなく与える行為が染み付いた男だった。

「その点、おぬしはダイゴくんと密に連携を図っていると聞く。託けくらいは許されよう」

「うふふ、そうですわね。鋼の貴公子を独占なんて妬けてしまいますわ」

淑女然とした笑みに負けてホールドアップで降参を示す。まったく敵わない。ダイゴと恋仲であることを明かしてはいながら、以前より明らかに睦まじい様子は筒抜けのようだ。

おおらかに受け入れられるのはありがたい。が、あまりあたたかく見守られるとどうにも決まりが悪い。四天王にとつても銀灰の青年は至宝である。そんな大切な存在に、いかがわしい意味でもとっくに親しくしていると知



れれば色々と恐ろしかった。

特にゲンジ。ムクゲと幼馴染である彼は、ダイゴを幼い頃から可愛がっている。

「よくつるんでるなら悪い遊びの一つや二つ教えてやれよ。御曹司サマは羽目を外すってことをしないから、逆に危なっかしくてしようがねエ」

「もう！ダイゴくんを不良の道に誘おうとしない！」

「品行方正の体現者みたいな方ですから……想像がつかないですね」

わいわいと盛り上がる会話に背中を冷や汗が伝っていく。

あくタイプのエキスペートに他意はない。ない、はずだ
多分。

「ふむ、ミクリ殿とてバトルとコンテストを極めんと邁進する身。そのような道には縁があるまい。なあ、ミクリ殿」

「は、ははは、ソウデスネ」

果たして、引き攣り笑いが気付かれずに済んだかどうか。
冷めたティーカップを傾ける。干上がった喉を潤す紅茶の味すら、緊張でろくにわからなかつた。

——そして、現在。

「……つ……ふふ、ツ、……つ」

「いつそ思いきり笑ってくれていいんだぞダイゴ……」「あははははっ！いや、すまん。けれどその時のお前を想像したら……ふふふっ」

珍しく声をあげて笑う恋人は眦に涙すら浮かべていた。
楽しそうでなによりだ。自分は生きた心地がしなかつた
訳だが。

ソファに並べた肩を引き寄せ、銀色のつむじを顎置きにする。つけっぱなしのテレビには、最近話題の俳優を起用した恋愛ドラマが流れていた。ちょうど两家顔合わせのシーンに己を重ね、フィクションよりも難易度の高い現実に遠い目となる。



ダイゴとは生涯添い遂げるつもりなので無論納得させてみせるが、相手のスペックのえげつなさときたら。

「やれやれ……ホウエントップ企業社長への挨拶もまだ

なのに、先に四天王最強のドラゴン使いと一戦交えるかと思つて気が気じゃなかつたよ」

「負けるつもりなど微塵もないくせによく言う。ふふ……僕たちが夜毎こんなコトをしてると知れたら、ゲンジは卒倒しそうだ」

首筋に濡れた舌が這う感触に欲の燠火が煽られる。挑むようすに微笑んだ青年が自らシャツを乱すその下。白磁に、朱の花弁が凄艶に咲き誇つていた。

「それで？ 今宵はどんな悪い遊びを教えてくれるんだ、ミクリ？」

オーダーメイドスースを纏わぬ痩身が男の誘い方を心得てゐるなど、いつたい誰が考へるだろう。ミクリにだけ許された恥態は禁断の果実にも似て甘美であった。

くらり、目が眩む。肚の底で吼え立てる獸欲が、愛しい雌をどう喰らつてやろうかと舌舐めずりした。もはや雑音でしかないテレビの電源を落とし、蹂躪を待つ唇に噛みつく。

「過激なのをお望みかな、私のダイヤモンド。では、みだりに男を挑発するはどうなつてしまふか——教えてあげようか」

ふたつの影が寝室に消える刹那、甘く絡み。淫靡な空気は夜の静謐を塗り潰して、ホウエンに君臨せし王達の蜜事がはじまつた。



脈打つ熱がびくびくと跳ねて白濁を吐き出す。ヘッドボードに背をもたせ、腕に抱く青年のペニスを存分に愛でたミクリは、指の間を垂れ落ちる薄まつた子種に双眸を眇めた。



「は、つ、あう……ん」

玉の汗を浮かべる背中が切なげに震える。男としての絶頂より射精伴わぬドライオーガズムに駆けられたダイゴは、達してなお胎内に留まる疼きに苛まれていた。しなだれる肢体が慈悲を乞おうと番に媚びる。

(いつ試そうかと思つていたが、ここまで蕩けてくれたなら問題ないか)

瑞々しい肌に新たなキスマーカを刻み、出番を待つていた性具を手元に寄せる。想い通わせた恋人、同意の上であつたとしても、なるほど『悪い遊び』であった。誰もが惹かれる宝石を、自分好みに研磨して仕上げてしまふ興奮。

陰茎をやわやわ刺激する手に小さく喘いだ銀灰が、異変に気付き長い睫毛を瞬かせる。

「ん……ミクリ……?」

「ダイゴ、もつと私に身体を預けて。そう……いいこ」
淡い照明にステンレスの光沢が反射する。指で掴む部分はリング状となつており、先端は緩くカーブを描く。マドラーに似た全長は、ビーズを連ねたような凹凸が続いて。

「……?」

変わった形状をまじまじ触つて確かめるあどけなさが胸を掴む。凜とした美しさに、無邪氣にも映る仕草の落差。ダイゴの不思議な魅力に紛されそうになりながら、眼前の形の良い耳に吐息と舌を捩じ込む。
片手で支えた性器の潤む鈴口を指先で抉じ開け、囁きかけた。

「ブジーといつてね。ここからゆっくり挿入して……ペニスの内側をごしごし搔き筆るんだよ」

「——ッ！ひ、つ、もりだ：つや♡あ♡」

「そうかい？でも想像してきもちよくなつただろう。本



「本当に挿れたらもつと凄いよ……お前の大好きな前立腺を直接抉って、捏ねて、可愛がってあげられる」

「……あ、うっ♡」

未知の恐怖に揺れた琥珀が、欲望に煮詰められて淫蕩に霞む。散々に舐め転がされた飴玉を想起させる色は甘くて美味しそうだ。

潤滑油で濡れ光る棒の先っぽを小さな口に押し当てる。ぶちゅりと鳴った水音が卑猥だった。

「ね、ダイゴ——私の手でおかしくなるお前をみせておくれ」「い、あ————ツツ！」

「き、す……つ、キス、して……くれ……ツ」とけない雛のように唇を開く。

「つ、ダイゴ……！」

かひゅつ。細い喉が痙攣し、気道で潰れた半端な呼吸が濡れた口唇から零れる。肉壁に埋まっていく鈍い手応えがずぶずぶと沈むプジーから伝わった。肛門以上に挿隘で纖細な粘膜である。固い器具に貫かれる違和感は相

当らしく、壊れた涙腺がとめどなく零を散らす。

慎重に棒を上下させ少しづつ尿道を進む。ローションを

足し、隘路を拓き、しかし絶えず電流を通されるかの如く強張る総身が痛々しい。……このまま続けていいものか。長く苦痛を強いてまで開発を强行する独り善がり、褒められた行為ではない、が。

「つ、……みく、り……」

煩悶を、掠れ声が制した。懸命に振り仰ぐダイゴが、いややぶりつく。痛みをやり過ごす方法に恋人からの口付けを選ぶ愛情が嬉しかった。本能が、細胞が叫ぶ。掌中の珠を愛し尽くしたい。ただふたつのいのちとして、交わり融けてしまったかった。

体液を啜り、舌が痺れるほど、ディープキスに耽溺させる。重ねて尿道も、ナカに残った精子と潤滑油を滑りにして



奥へ奥へと侵入し。

こつ、引っ掛かる感触に行き当たった。

「～～が、あツツ！♥ひぐつ♥やああツ！♥あ♥あーツツ
♥♥♥」

「は、ンう…つ♥♥う、あ…つ」

「……こだ。よく頑張ってくれたね。さあ、たっぷり
味わってくれ」

「お腹がずっと波打ってるね。気に入ってくれたよう
で良かつた」

「み、ツ、みうり、つ♥♥やめ、て……！♥やらつ、い
ぐ、いく…うう♥♥」

「――ツツツ♥♥♥“お、あつ♥？♥あ、つ？♥♥”
――ツツツ♥♥♥お、あつ♥？♥あ、つ？♥♥」

器具がずつぱり嵌まった瞬間、玲瓏たる美貌は恍惚に屈
伏した蕩け顔を晒した。柳腰がはしたなく前後にかくつ
く。己を襲う感覚をはつきり快感だと理解しないまま渴
いた絶頂に至り、ダイゴは束の間意識さえも失っていた。
たらり、力をなくした舌を甘噛みしてブジーを動かす。

細い棒の先でぐりぐりとしこりを捏ね回すと獸染みた痙
攣が痩身を包んだ。

ブジーの角度を調節する。とつ、とんつ――とちゅんつ
♥

直接潰される前立腺とはかくも凄まじい法悦の源泉とな
るらしい。快乐に叩き起こされて泣きじゃくる青年は、言
葉と裏腹に尿道責めの虜だった。

こりゅこりゅこりゅつ♥固く主張する果実を抉り続け
れば薄い下腹がうねってメスイキを咀嚼する。棒の凹凸が感
じられるよう襞に擦りつけながらグラインドすると、玉
がごりごり隘路を拡張するたび嬌声が滴った。白濁混じ
りのカウパーとローションを泡立てて抜き差しを繰り返
す頃には、恥も外聞も捨てた迎え腰で快乐を貪つて。

「あああツ♥♥イツてる♥び、つ♥♥んツ、あん♥あー…
つ♥♥♥」



とろとろ溢れて止まらない唾液を吐息ごと飲み下す。胃の腑に落ちる甘露に肌が粟立つた。うつろな一対の宝石に映る男は、狂乱に手綱を委ねようとする雄でしかない。

「ダイゴ……っ…乱れるお前も美しい…、ツ、ん……っ」

「——～～♥♥♥ちゅ♥んつ♥う、う…ツ♥」

ブジーで再び奥まで貫き振動を送る。射精の機能を奪われ、絶頂感を溜め込むペニスの脈動が哀れで愛らしい。上半身を辿る指で膣をいじめ乳首を捻る。銀灰の艶姿を前にしてテントを張った局部を、ズボンの布地越しにまろい臀部へ押し付けて。

キュ♡キュン♡蓄が熱杭を求めて健気に収縮する有り様に、なにかが干切れる音をきいた。細く引き伸ばされた、理性の糸だった。

少し腰を進めただけ。にも関わらず、蜜壺は食虫花を思わせる貪欲な蠕動で滾る肉棒を飲み込んだ。若干引き攣れる感覺はあれど、直腸の襞は濡れそぼつてミクリに甘えてみせる。

「う、ツ、ひあつ♡みく、り……あ、つい…つ♡はいつ
ちや、…あつ♥」

「——ツ、すまない、ダイゴ…！」

ろくにほぐしもせず、コンドームすら疎かにするセックスは初めてだ。切り離された思考が粗暴な行いを咎める声も、抑止力として不足であった。もどかしく取り出したペニスを数度扱き、四つん這いにしたダイゴの後孔に亀頭でキスする。蠢く縁が歓喜とともに先端を包んで、くぐもるテノールは陶然と独りごちた。

脳が、沸騰する。奥歯を軋むほど噛み締めなければ、天上の美術品の如き肉体にきっと牙を立てていた。

「あう、ア、～～～ツツ♥♥♥」

「く、ツ、はあ…つ！」

「絡みついて…つ…気持ちいいよ、ダイゴ…お前は、つらくないか…？」



やわやわと食む粘膜を味わうピストンが止められない。

される……」

「ミリに満たない膜でも、取り扱えば快感は段違いだ。複

「つ♥あ、み、くり……♥おく、おくまで、きてう……ツ

雜にうねる肉輪でペニスを扱く腰使いにも熱が籠る。腹

「♥♥♥」

側のざらつく壁をカリ首でこそげる前後運動は、こちら

まで感じ入る心地好さだった。

「うツ♥あ、おツ♥ふあ……あーツ♥」

ぐりゅ……♥亀頭がねばつく糸を引いて結腸口を撫でる。

そつと振り向かせた麗顔は、とろとろに溺れた甘え顔だつ

た。あえかな吐息にも、淫らに揺れる腰にも、最奥で孕

みたいとねだらされているようだ。

対して、鋼の貴公子は息も絶え絶えに喘いでいる。尿道と後孔から前立腺をもみくちやにされて、拷問に近い連續絶頂に押し上げられているのであつた。性器に刺さったブジーを回転させると、綺麗な曲線を描き白い背中が悶える。今にも崩れそうな足がガクガクと震える様も劣情を加速させた。

ダイゴの顔が見たい。茹だつた思考で上体を倒す。汗と精が入り雜じつた恋人の匂いがぐつと近付き、挿入する肉棒の硬度が増した。

「——ひあ、アツ♥♥」

「ツ！はは、締まつたな……おまえが悦いと、私も満た

荒れ狂う法悦の海に投げ出された青年を強く抱き締め、深く重たい快感に蠢動する肉穴を穿つ。ぐちやぐちやに交わる結合部から広がる快感は四肢の先まで痺れさせ、低い呻きが零れた。一突きごとに、人間性をも捧げる錯覚。セックスよりは交尾という表現がピタリと嵌まる行為だつた。

「ぐ、う……ツツ！つ、は、ア……ツ！」

「くくくあ、あー……ツツ♥♥♥あ、うあ♥……あつ♥

♥♥」

それでも、最後の最後で正気を手繕り寄せて。絶頂の瞬



間にペニスを引き抜き、桃色に熟れた臀部に向かつて射精した。痙攣収まらぬ瘦身を汚すザーメンの生々しさにゆつくりと思考回路が冷えていく。

やつてしまつた。無理をさせすぎた。年上として己が自制しなければならないのに、あまりにもダイゴが可愛いからつい責めが苛烈になつてしまふ。

「ダイゴ、大丈夫か……？今、抜いてやるから……」

「ツ♡や、まつ、て……♡ぬいちゃ……っ」

焦りを滲ませた聲音が鼓膜を引っ搔くのと同時。ずるるるるつ♡リングに添えた指は呆氣なくプジーの全貌を露出させ、塞き止められていた欲を解放した。

「やツツ♡♡あーっ♡♡♡」

「…………あー。やはり私は一度、四天王に肅清されるべきかもな」「…………？」

ぱつくり開いた鈴口から、途切れ途切れに白濁が漏れる。いじくり回された尿道を粘液が通る刺激は断続的に青年を甚振いたぶった。きめ細かな肌に汗が吹き出し、倒れ伏す体がシーツの波にもがく。

嬌声は、ほとんど泣き声に変じていた。

「もれ、ちゃ……っ、やだ、やああ……♡♡」

みないで。

自信に溢れた彼らしからぬ、消え入りそうな願い。原因となるアンモニア臭が情事後の空気にむわりと漂う。萎れたペニスは失禁に至り、膀胱の中身を垂れ流した。

許容範囲を越えた羞恥に小さく丸まってしまう姿に下肢が危うく反応しかける。恋人の粗相は歪んだ興奮を搔き立てるばかりで、くすんくすん鼻を鳴らす音にも欲情する始末。

「…………あー。やはり私は一度、四天王に肅清されるべきかもな」「…………？」

「泣いて震えるお前をもつと悦がらせて愛でたいと願つてしまふ。まったく、優しくない」

重苦しい溜息をついて項垂れた。スマートで優しい理想



の恋人でいてやりたいが襟に入れば愚かな雄に成り下がる。清廉な魂に淫蕩を教え込む甘美を貪るなんて悪い男だろう。

くんつ。一房、摘んだ髪を引かれた。唇の端に羽で擦るキスが落ち、呆気にとられる。

「……ミクリだから、すべてゆるしている。ふふつ……
ぼくがおまえの味方をしてしまうから、袋叩きにはならないな」

「——あまり私を甘やかすものじゃないよ、ダイゴ」

いくつもの泡が生まれ、弾ける音を聴いた。己の内側に海がある。滾^{こん}滾^{こん}と溢れ、ときに騒めき、渦巻き、いま穏やかに凧^{たん}いだ水面ははにかむ青年を前にまた、嵩^嵩を増して。唇を重ねて臉をおろす。深海に沈んでいくようなキスだった。



扫描全能王 创建

い
つ
つ
め
の
夜



扫描全能王 创建

閉じた玄関の前で、立ち尽くしていた。数日後に控える

退屈だね」

ポケモンコンテストライブ・マスタークラス。他地方のゲストや新しい試みを導入するイベントに、此度は運営で関わる男が連絡を受け慌ただしく飛び出していったのがついさっき。

大きな催しに不備やトラブルはつきものだ。己を残していくことに眉を下げるミクリを快く送り出したはいいが、広い家にひとりの実感がじわじわと足元の熱を奪う。浮かれていたのかもしれない。互いに多忙を極める合間の遙瀬は、どうしたって思慕を抑えられなくなる。

ラブカスと戯れることが多い手持ちを撫でる。ひんやりゴツゴツした手触りに目を細めると、主人想いの子は懐っこく頬にすり寄った。これではどちらが慰められていることやら。苦笑しつつ、暫し好意に甘える。

他人のぬくもりに寄り掛かるより、はがねの冷やかさにやすらぎを得る機会が多かった。それを不幸と考えはない。生まれついた境遇は恵まれたものと認識しているし、付随するデメリットも致し方ないと早々に理解したからだ。

「……それだけミクリの存在に慣らされているのか、僕は」

ツワブキ・ムクゲの息子だから不自由ない環境で学び鍛え、目を患ったときも万全のサポートを受けられた。デボンの御曹司という事実だけで妬み恨みを向けられ、他人との間に透明な境界線を引かれた。

ふたつの事柄は表裏一体。コインの裏表と変わらぬ事象になぜ疑問を抱くだろう。

紅玉の单眼。磁力で浮遊する洗練されたフォルム。

「こうてつ……お前も遊び相手が行ってしまったから、

——お前はもっと、己の痛みに敏感であるべきだ。人は石ほど頑丈にできていない。脆さとは恥じるものではな



いんだよ、ダイゴ。

（……うん。ちゃんとわかっているよ、ミクリ）

『陸』と『海』の衝突後、真摯に言い聞かされた言葉を抱き締める。思えば奔放な男がダイゴという人間を顧みるようになつたのは、件の騒動が境であつた。親友の立場といえど互いに別の方向、別の価値観を見据えていたため、当時は首を傾げたものだ。

その数年後、彼の忠告を忘れた挙げ句に現チャンプをギリギリまで蚊帳の外に置いた隕石事件。解決後、大喧嘩に発展したのは余談である。恋仲に至るきっかけであり、他者とはじめて本音でぶつかる経験だったが、一度とはゴメンだ。

指輪をつけたまま人を殴ると凶器としては優秀だが、自分も結構痛い。清廉潔白な御曹司の得た学びであつた。

「……はあ」

まあ、とどのつまり。ダイゴに人肌の心地好さを教えたのはミクリなのだ。認めよう。今、己は寂しさを感じてゐる。

眠るには早い時刻。手持ちの世話に没頭したい気分だった。研磨剤にタオル、専用の薬液。水のプリンスの領域に完備された鋼タイプケア用品は、穏やかに降り積もる日常の証左であつた。



いかに先伸ばそうとひとり寝の夜は避けられない。あれから時計の針は一回りし、日付も変わろうかという時間帯である。

往生際悪く確認した通信機は沈黙を守っていた。

きしり、スプリングが控えめな音を鳴らす。温度のない褥はよそよそしく、恋人と過ごす蜜月を心待ちにしてい

「……おいで、こうてつ。君たちの手入れをしよう」



た本音を突きつけた。振り切るよう、勢い良く枕に顔を埋めて。

(……あ)

失敗した。綺麗にベッドメイクされたそこは紛れもない愛の巣だ。ミクリの匂いが、染みついている。ミクリの存在に満ちている。

鼓動が徐々に早鐘を打ち、体温が上昇する。思考回路が翡翠の面影をサルベージして、勝手に再生を始めてしまえばもう抗えない。

『ダイゴ』

「…………っ」

目蓋を閉じ、添えた指を緩慢に上下に扱く。

鼓膜の奥、柔らかなテノールに名を紡がれて。たった三

文字の組み合わせで馬鹿みたいに脳髄が痺れる。寝返りをうつて幻を追い払おうにも、ひとつ灯った記憶の火は身の裡にぽつぽつと熱を伝播させた。

ふ、と吐く息にすら官能が混ざる。いけないと自制を試

みるほどむしろ背徳の芽が育つようだった。下腹が、直腸の奥深くが疼く。擦り合わせる膝の間が落ち着かなくて、このまま眠るには支障が出るのを認めざるをえない。下履きをいっしょくたにずらす。ふるりと外気に晒された性器は快楽を求めて上向き、ダイゴを情けない気持ちにさせた。

(こんな、はしたない……はやく終わらせよう)

恋人にはもつと恥ずかしい姿まで許しているが、それとこれとは別である。元来性行為に興味が薄く自慰も最低限で済ませていたがゆえ、欲を持て余す状況に抵抗が残るのだ。

「…………っ、ん……」

直接的な性感がぞわりと恥骨に響き、唇を噛んで機械的に手を動かし続けた。裏筋からカリ首、弱い場所を重点的に擦り、刺激して。少しづつ溢れる先走りを全体に塗



り広げながら往復するうち、違和感に気付く。

「……物足りない。快樂は拾っているのに、一定のライ
ンから体がそれと認識してくれない。熾火が肚に燻って、
ジリジリと焦がされる感覺。もつと深く、もつと甘やか
な悦びを知ったからこそその弊害だつた。

「う、ん……っ！どう、して……ッ」

虚しいひとり遊びは神經をささくれ立たせ、余計に絶頂
を遠ざけてしまう。指の腹で亀頭を撫で回し尿道口を穿つ
てみても、思うような終わりに至れない。

ぼろり、熱い零が頬を濡らした。切なくて、不安で、自
分の変化についていけない。だって今まで、こんなこと
なかつた。

「……っ、ミクリ……！」

途方に暮れた子どもみたいに助けを求める。中途半端に
放り出された身体を解放してほしかつた。

『ダイゴ。大丈夫、すべて私に任せておくれ』

「……あ……っ」

果たして救いは、暖かな思い出の彼方からもたらされた。
記憶に焼きつく男が微笑む。声が吐息が肌を擦るようで、
ふるりと肩が震えた。

肉体の、快樂へのスイッチが切り替わる。恋人の癖をな
ぞつてペニスを愛撫した途端、鋭い痺れが脊椎を突き抜
けていった。

「は、う……ッ」

『きもちいいかい。ふふ、乳首が固くなっている。服の
上から引っ搔いてあげようか』

「ッ！ン、ああ……っ」

エルフーンの綿が織り込まれたコットンリネン地の下に
主張する小さな突起。性感帯に開発された乳首をパジャ
マ越しに片手でくりくり弄る。胸の奥にじんと染みる心
地好さで鼻にかかった嬌声が零れ落ちた。
ダメだ――、きもちいい。ミクリのいないところで淫



奔に振る舞う葛藤が霞む。翡翠の輪郭を辿り刹那的な果てを追う行為の、なんて甘美なことだろう。背徳の味とはかくも精神を眩ませるか。

感度を増しつつある肢体の上を、見えざる慰撫の指先が這いざる。白濁滲むカウパーが竿をとめどなく汚していった。会陰から、その奥。もう言い訳できないくらいに発情する蓄が潤み、綻ぶ時を待つ。

「……あ、は、……あっ……」

躊躇いは理性と共に蒸発してしまった。粘液に塗れた手がゆっくりと後ろに回る。欲しがりな肉穴は、ぎこちない己の指でも構わずに咥え込んだ。

ざわめく内壁を細い質量が摩擦する。火照った襞の柔らかさを感じ、食い締めた奥歯が軋む。胎内に荒ぶ悪寒は麻薬的な快感の前兆だと、芯まで理解させられた。

「ふ、うう……ひ、……っあ……！」

第二関節ほど挿入した先、腹側のしこり。雌の絶頂根差す前立腺を押し上げる。パチパチと弾ける快電流に全身が強張り、呼吸が詰まる。必死に思い出しながら撫で擦る手淫に技巧と呼べる動きこそなかつたが、飢えに酷似した空虚は少しだけ楽になった。

こりつ。こりゅつ。拙く捏ねるたび、肚が蕩けて足指が丸まる。頭がぼうつとして、心音が鼓膜の裏側で脈打つ気がした。ゾクゾクが止まらない。激しく搔き回せば極まりそうで、けれど覚束ない自慰では最後の一押しに届かず。

記憶の端に、サイドテーブルの中身が浮かぶ。いまだ未使用で引き出しにしまわれた、チープなオモチャ。

(あんなモノを勝手に使うなんて……。だけど、このままでは……)

ベッドに沈みたがる身体を起こし、胸で遊んでいた指先を伸ばす。整頓された二段目。ローションと隣り合うそれの形を皮膚感覚で認識した瞬間に悩ましい吐息が落ちた。



アダルトグッズを発見した初日、呆然と手にしたバイブルである。頼りない視覚では毒々しいショッキングピンクも瞼なのが幸いだ。少なくとも正気で向き合う勇気は持てそうにない。

の姿を埋めていく。圧迫感と、鈍く響く痛み。苦しいだけの波が過ぎれば、あとは快楽中枢にひとりと絡みつく性感がこみ上げた。

シリコンで形成された男性器にコンドームを被せ、潤滑

「うう、く……ッは……」

れなかつた。所詮作り物のペニスだとしても、恋人以外に無遠慮に暴かれたくはない。紛れもなく愛を根底とした無自覚の発露であつた。

後頭部を柔らかな枕に預け、呼吸を整える。直腸が貪欲に蠕動していた。もつと、強い刺激を。滑らないよう持ち手を握り締めスイッチを入れる。

いかに肉欲に食まれてしまふか、異物を自ら插入するには胆力が必要だ。収縮する縁に恐る恐る先端をあてがう。深呼吸をひとつふたつと繰り返すうち、また、人魚の歌を聴いた。

「ううツ、あああああツツ！うあ！あーつ！」

『ナカが一生懸命甘えてきている……いいよ、突いて抉つて、天国に連れていくてあげるから……存分に、啼いておくれ』

「あ、あッ、ああ……っ！」

ず、ずぶぶ……。隘路に引っ掛けながら、淫具がそ

「ヴヴヴヴヴヴヴッ！」前立腺を殴る暴力的な快感にシーツを蹴り、背中が弓形に反る。射精を伴わぬドライオーガズム。待ち兼ねたはずの忘我はしかし、カラダとココロの決定的なズレをダイゴに思い知らせた。

こわい。取り繕うことなき本心でそう思う。自分が自分ではなくなつてしまふ絶頂に溺れても、力強く抱き留め



縁となる腕^{かひな}が存在しない。愛おしいとこの身を包む眼差しも、なにも。

ローションを搅拌する質量とて標準程度の大きさだが、何度も咥えたペニスと比較すれば粗末に感じた。

「あ、あうッ！み、くり……！ツツ！ミクリ……！」

バイブルの責めで手軽な絶頂を貪つておきながら、置いてきぼりにされた感情が叫びだす。唯一人を欲しがつて深奥にわだかまる熱をどう冷ませばいいのかわからない。一度達せば落ち着くだろうなんて、甘かったのだ。恋しくて恋しくて、馴染んだミクリのぬくもりを探してしまった。

「いや、だ……また、くる……みくり、ツひあ……ツあ、あ……え……っ？」

泣きじやくり、立て続けに迫るオーガズムに身を固くしたとき。カチリ。スイッチが切れ、後孔を犯す動きが唐突に静止した。自分で操作したわけではない。いったい、なにが。

目蓋を開く。涙の膜がボロボロと決壊し、不明瞭な視界に翡翠が揺れた。

「あ、……ミ、クリ……？」

「——ああ。お前の恋人だとも、ダイゴ」

竪琴^{ハープ}を爪弾くようなテノールが答えて、ベッドが軋む。

いつ、帰ってきたのだろう。今さら感知した気配が夢でも幻でもないことを、紅潮した頬に添う大きな掌が教えてくれた。泣き濡れた跡を親指で撫でる仕草の優しさに全身の強張りが解ける。そつと唇が触れ、舌先に歯列をなぞられるだけで腰が震えた。

五感がミクリという男を拾い上げ歓喜する。ほとんど機能しない眼にすら彼の色彩は鮮やかで。幼き日一日惚れした水の石を想起させる輝きに、繰り返し恋に落ちる。

「ン……ついつ、から……」

「ふふ、帰ったのは本当にいさつきさ。気が急いで連絡も怠ったのは悪かったよ。でも……まさかお前がコレでひとり遊びしているなんて」



「ツあ！ア、あつ♡」

バイブがずるずると抜ける刺激に肌が粟立つ。ぱっかり粘膜を晒すアナルは寸前で取り上げられた絶頂を惜しみ細かく痙攣していた。あられもない場所に刺さる視線に、羞恥心が息を吹き返す。考えてみればとんでもない醜態だ。慌てて恥部を隠そうと試みるも、目の前の男が許してくれない。

「い、いやだ、ミクリ……！」

「なぜ？私を想ってシていたんだろう。隠さないで。お前のすべてを愛したいんだ」

涼やかな聲音は静穏を保つようで、実際には奥底にどろどろと滾る欲を内包していた。興奮、しているのだ。みつともない自分を前に、ミクリは幻滅どころか雄としてこれ以上なく昂っている。

くぱあ……っ♡人差し指と薬指がひくつく縁を広げる。潤滑油がクモの巣を張る内側に艶かしい眼差しが這い、直接の愛撫もなく極まってしまいそうだった。

「イキそだつたからひくひく震えている……けれど、前戯をおざなりにしたね。纖細な粘膜だから労らないと」「うあ、アツ♡だめ、こすつたら……ツああああ♡♡♡♡」

差し込まれた中指が腫れた前立腺を転がし、風船を針で突くみたいに快感が弾けた。跳ね上がった身体を抱き締められて多幸感に包まれる。逃がしようのない恍惚が腹腔に留まり、交合への欲求が鋼の意志を跡形もなく蕩かす。

腕の中で感じ入るダイゴに、キスの雨が降り注ぎ。

「足りないだろう、ダイゴ。寂しい思いをさせた分、お前が欲しがるだけあげようね」

水のプリンスと称賛される美貌は、蠱惑的に微笑むのだった。



「——ああッ♡う、うー……っ♡つ♡♡」

かく、かく、尻を震わせて悦びに浸る。あれからどれだけ経ったのだろう。十分かもしれないし、一時間かもしれない。濃密な前戯は時間感覚を消失させ、正常な思考をも奪い去っていた。

「ん、ちゅ……っ：舐めているだけなのに、いくのが止まらないね。さつきよりもずっと柔らかくなつたし、そろそろ挿れても大丈夫かな？」

「んッ♡う、ん……♡♡」

所謂シックスナインと呼ばれる体位で折り重なつて、纏うものなきふたりは互いへの奉仕に耽溺していた。とは言つても、ほぼ一方的にダイゴが啼かされているのが現状だ。

まるで別の生き物の如くうねる舌に肉襞を掻きわけられると、下腹にとぐろを巻く法悦で身動きがとれなくなる。収縮する縁を悪戯につつき、粘膜の凹凸に唾液を塗り込めながらぐるりと舐め、腸液などの混ざりものを音を立

てて啜られ。顔から火が出そうなほど恥ずかしいのに、それすらも被虐というスペースに変換される。メスイキを味わう蜜壺は、ミクリとのディープキスに陥落していた。

「は、アッ♡みくり、も、う：っはや、はやく……っ♡

焦れきつて目の前のペニスに縋りつく。雄々しく反り返るその先端を口内に招き、上顎と舌で挟んで懸命にしゃぶる。余った竿を両手で扱けば、とろりと味蕾に溶ける塩辛さと性臭に脳が痺れた。

血管が浮き、精巢に子種をたっぷり溜めた剛直に貫かれたらしさぞ気持ちが良いだろう。肛門舐めで漏らすように白濁を垂れ流す己の股座と比較し、深い絶頂の波が再び訪れる。

「あ、うー……ツッ♡♡♡」

「つ、はッ、今のは、危なかつたな……」

亀頭にちゅうちゅう吸い付いて眦を濡らしていると、後ろからひそやかな苦笑が聞こえた。ダイゴ、動けるかい。



言葉の意味を咀嚼して、上体をずらそうと肘に体重をかける。

だが、余韻の引かない身体はぐにやぐにやと危なつかしくシーツに頬れた。骨が溶解したみたいだ。鋼の貴公子とは外部が持て離した結果の呼称だが、男に抱かれて陶然と喘ぐツワブキダイゴを誰も想像するまい。

ミクリだけが知っている。ミクリにだけ、許せる。

「……？」機嫌だね。その表情を引き出しているのが私だと嬉しいけれど

「……つ、おまえ以外に、いるものか。このダイゴを淫乱にしつけておいて」

賢しら顔で言い募る恋人の肉棒を撫で上げる。息を飲む反応に指を往復させると、さすがに切迫した声で奢められた。

知らず、笑っていたらしい。汗で張りつく髪を払い、額に口づける男に事実を返す。それより早くと足を蹴った。びくともしない体幹が悔しい。

「おっと、情熱的なお誘いだ。待ってくれ、ゴムを…」

「いい」「ん？」

「そのままで、いい」

開けっ放しの引き出しを覗こうとしたミクリの首に腕を回し、引き寄せる。驚きを滲ませたグリーンガーネットは、逡巡にうろうろ虚空をさまよつた。

「それは……お前のためにならないよ。万が一ナカに出そるものならリスクが高い。腹を壊すぞ」

孕むでもあるまいに臆病者め。格好をつけたがるきらいのある彼は、要は止まれなくなるのが怖いのだ。

どこまでぐずぐずにされたとて、ダイゴは触れたら崩れる砂礫ではない。ブジーを使用した行為のあと自己嫌悪していた姿も気に食わなかつた。もつと獸になればいい。必死になつて腰を振る、みつともなくもうつくしい番を愛する権利が自分にはある。



「なら、せいぜい腹を壊さないように終わったあと搔き出してくれ。僕が欲しいだけくれるんだろう?——全部寄越せ、ミクリ」

「……そんなワガママ、いつの間に言えるようになったんだ」

瞳目する気配。そして。

「承ったよ。私の御曹司サマ。ただし、後悔しないように」

ぐつ、と灼熱が膣にめり込んだ。雌を屈伏させんと唸る
鋒はすぐに挿入されず、会陰とアナルとをカウパーで汚
しつつなめらかに行き来する。胎内をこれから満たすモ
ノの存在感を、刻みつけるようであった。

つるりとした皮膚の部分を圧迫されるとそれだけで微弱
な快感が走る。外側から前立腺を捏ねる動きに期待が高
まり、両足は左右に開ききつて。

「あ、は、～～～ツツあああああ！♥♥♥」

「う、く……っ！」

長大な楔に穿たれ、眼前を星が瞬いた。ずりゅう……っ
しこりを擦り潰して奥まで届く熱杭に腸壁が甘え絡まる。
挿れられただけで達した。それを理解する前に、さらなる
恍惚を上書きされる。

ぬるるるるるっ♥カリの段差で襞をこそぎながら抜けてい
く衝撃に、魂まで引きずり出されるかと思った。腰が勝
手に追い縋る。いかないでと亀頭を舐めしゃぶる粘膜が
捲れそうだ。

「い、っア、あーーッツ♥♥」

「はあ……っ……相変わらずの、名器だ……ゆっくり抜く
のもイイけど、お前はこっちが好きだろう?」

「つ♥おッ♥んんっ♥あ、あああっ♥♥」

太い幹が隘路を進み、亀頭が前立腺の真上に当たつたと
ころで緩やかに前後する。さざ波に似た満ち引きは泣き
所を捏ね回し、ドライオーガズムをもたらした。



このイキ方をすると「己」の肚はあり得ない錯覚に囚われる。

最奥と思い込んでいた行き止まりの、さらに先。純潔を保つ狭い肉輪が、種に孕まされるための器官になつたようだ。

「あ♡ツツ♡あーつ♡あ♡あ♡あ♡あツ♡」

枯れない涙がいつそ不思議だ。喜悦の証は途切れることなく。舌を突き出して泣き喘ぐ顔のあちこちに慈しみのキスが降る。

あやす仕草はいつも通りだが、コンドームを介さない交わりはミクリにとつても凄まじい快感となっていた。眉根を寄せた表情は元が麗しいゆえに凄艶な印象を与え、フェロモンが褥を、室内を塗り潰すかと思われた。

怒張を奥へ導こうと蠢動する後孔に雄の腰使いも激しさを増す。浅瀬で快樂を楽しむ余裕が剥がれ、本氣で番に種付けようとするピストンにダイゴも夢中で応えた。肉穴を圧倒的な質量でいっぱいにされるのが堪らない。

「ダイゴ…ツ、ここに私を、いってくれるね…？お前の

大事な、一番奥に…！」

「ツ♡あ、あ♡おく♡とんとん、されて…つ♡♡」

とちゅ、にちゅ…つ。肉棒の先端が直腸の窄まりとキスを交わすたび、脳が溶けて深い雌の絶頂に墮とされる。我慢汁でマーキングしながら腰をぐりぐり回されると、まだ結腸を抜かれてもいいのにピンと足を伸ばしてイキ果てた。

ずっと、『キモチイイ』から降りられない。玩具で得た快樂など児戯に過ぎなかつた。愛する者とのセックスで生まれる幸福感に溺れ、微笑む。

「ミクリ…♡きて、くれ…つ♡ぼくのなか、おまえのたねで、つ、いっぱいにして…♡♡」

もう、なにを口走っているかも曖昧だ。確かなのは幸せで、慕わしくて、内側の熱が愛しくてならないということ。

快樂物質が飽和しているせいで現実との境目も滲む。目を醒ましたまま、翡翠の夢を見ているのだ。



「——ツ！本当に、お前には敵わない……！」
「あ、ひアつ♥♥ああ、ア、はいっ、て……♥~~~~」
♥♥♥

——ぐぱんっ！

綻ぶ結腸弁へと執拗に熱杭が叩きつけられ、何度も目かの挿抜でくぐもった打突音が下腹に響いた。同時に、腹の間で揺れるだけとなっていた陰茎から生暖かい飛沫が迸る。

「が、あ……ツツ♥♥あ、あーっ♥♥♥」
「ぐ、あ、あっ……！」

濁った嬌声の聞き苦しさすら認識の外だった。耳朶を擦る恋人の呻き声まで性感に直結する。

(ミクリ♥♥ミクリが、おくに、ぼくの子宮にきてる……)
♥♥♥

ズタズタに千切れた思考回路は完全にトんでいた。内臓

をありもしない器官に見立てて興奮する倒錯した快感で、脳イキを味わう。ほとんど力の入らない足を逞しい腰に絡め射精を促す誘惑に、熱の籠ったピストンは雄々しくanusを穿ってスプリングに悲鳴をあげさせた。

「ツ♥♥ん、おっ♥お♥あ♥あツ♥♥」
「ダイゴ……！ダイゴ……！は、ダイゴ……！」

ぐちゃ♥ごちゅっ♥どちゅんっ♥

どろどろに蕩けた結合部から四肢の先に広がる恍惚で自我の輪郭が解けていく。ミクリもそうなのだろう。結腸口の窄まりでカリ首を扱きふわふわ柔らかな肉輪にペニスを食ませる男は、荒れ狂う肉欲に宝石の双眸をぎらつかせていた。ダイゴが種付けられるのを望んでいるように、ミクリも孕ませることしか頭にない様子だった。

唇が、肌が、全身が隙間なく密着して安堵に包まれる。表舞台では誰に頼る必要なく一人で立つのも慣れたものだが、ベッドの中では互いだけが縁であった。ぬくもりに、すくわれていた。



「い、くう…っ！♥いく、いくッ♥♥みくり、つ、いつ
ちゃ、あ、ああッツ♥♥」
「ぐ、つ、ダイゴ、出すぞ…！私の子種を飲み干して、イ
け…ッ！」

果てに向かって腰が真上から叩きつけられる。負担の大
きい体勢に折り畳まれた身体は軋んだが、多少の痛みな
ど淫汁をはね飛ばしながら抉られる蜜壺の快感の前では
塵に等しい。灼熱に貫かれる媚肉の痙攣が続く。胎内で
搅拌された法悦の塊が爆ぜようとしていた。

いや、それ以上に、腸壁を蹂躪するペニスが膨らんで。

脈打つて。

「——ツツツ！♥♥♥」
「あ、ぐ、……うツ！」

これまでのオーガズムと比較にならない絶頂に、声すら
出なかつた。また、潮が素肌とシーツに飛び散る。
どぴゅつ♥びゅるる…♥今まで薄っぺらな皮膜が受け
止めていた精子が、結腸の柔肉を白く染める。もつたり

と重くて濃い、力強い雄の証。肚の奥が蕩ける。子種を
襞に塗り込めるピストンで最後の一滴まで馳走され、余
韻から解放されない爪先が丸まる。

「ん、む…っ♥う♥ン…ツツ♥♥」

垂れ落ちる唾液を拭うのも忘れた唇が優しく塞がれて。
陶然と見つめる先、ミクリのこめかみを流れる汗に胸が
高鳴る。振る舞いの優雅さにこだわるくせして、セック
スの最中は誰より男臭い。愛情深さと独占欲の強さがそ
うさせるのだろう。

一人の人間の裡に、まるで海が内包されているようだ。
恵みを与える穏やかな側面があれば、荒々しく相手を奪
う一面も持つ。単に美しいで終わらない、捕食者の顔。
好ましくて見惚れていると、キスに満足した男は不敵に
笑つた。

「ミク、つ、ふあああッ?!♥あ、え、あつ♥♥」
「よつ、……と。ふふ、すごいね。ナカがぬるぬるして、
少し擦れるだけでも堪らない」



「や、やっ♡なに…っ♡♡」

「うん？ダイゴ、お前が望んだだろう。お腹いっぱいまで欲しいって……だから、付き合つてもらうよ」

浮遊感に襲われたと思えば、繋がったまま体位を変えられて軽くイッてしまつた。胡座をかいたミクリの上面で乗る形だ。もはや脱力してもたれかかるくらいしかできないが、精力旺盛な恋人は気にしていない。

下から緩慢に突き上げながら乳首を口に含まれて、僅か躊躇つた正気は瞬く間に粉々となつた。

「ああッ♡らめ♡また、い…っ♡♡んんーッ！♡♡」

「つ、可愛いな、ダイゴ……愛しているよ」

「あ…♡ぼ、く……つ、ぼくも、みくり……♡♡」

愛を囁き、啄むキスで想いを重ねる。精液を搔き混ぜる抽挿もやがて狂おしい交わりに変化して。ひとりでは広すぎるベッドは、ふたりの熱でぐちやぐちやに乱れきつた。

律動に紛れて、固い素材がカーペットにぶつかる鈍い音

が鳴る。誰にも気付かれない音の主はショッキングピンクの本体をてらてらと光らせ、卑猥な行為の名残を物語つていた。



ある夜明けの話



扫描全能王 创建

ふ、と自意識が泡のように浮かび上がった。夢も見ない深い眠りであつたが、思考が覚醒するより先にこの数年で染みついた『癖』が働く。腕の中、閉じ込めた存在の輪郭を丹念になぞる癖。

月光を束ねた銀糸を梳かし、閉じた瞼に影を落とす長い睫毛に触れる。高く整った鼻梁を辿って、きめ細かな頬の手触りを堪能した。寝息を零す唇にひとつ口付け、手のひらを滑らせた先。パールグレイの寝衣を纏って静かに上下する胸元を、じっと探る。ダイゴの、^{いのち}生命の音だ。

ほつと胸を撫で下ろし、もうひと眠りと視線を上げて。

「うおおっ!?

「やかましいぞ、ミクリ」

「お前にこそ休息が必要だろうに……コンテストの余韻で眠れないなら僕が寝かしつけてやろうか」

「つ、ダイゴ、おい……ッ」

琥珀の鋭い眼光と目があつた。起き抜けで声音こそふわふわしているものの、透徹とした眼差しに貫かれれば驚きもする。

掠れた囁きが艶かしく鼓膜を愛撫し、わだかまる憂いが吹き飛ぶ。してやつたり。満足そうな表情の恋人が上体を起こす。跨がられたところで慌てて腕を掴んで止める

「すまない、起こしてしまったな」「ん、構わないさ。元よりショートスリーパーだし、とくに昨日は体力を消耗していないから」

暗に普段のセックスの激しさを仄めかす悪戯な笑みに抱擁で返し、眠りから醒めたばかりのぬくもりを囁み締める。

ダイゴは何も訊かない。ミクリも、何も言うつもりはない。己でも言語化に困る感覚なので『何も言えない』が正確なのだが、悪夢の影を怖がる子供のようで決まりが悪かった。



「お前だつてプロジェクトがひとつ終わつたばかりと言つていたじゃないか。無理は、」

「……こはもうその気みたいだが？」

「…………。」

すりすり。柔らかな尻に擦られて、テントを張る局部に頭を抱える。それぞれに大きな案件を片付けた直後だとうのに、疲労を押しのけてまぐわおうとする男の体の正直なこと。行為に及ばず就寝を提案したのは自分だ。まったく格好がつかなかつた。

可笑しくてならないと眼を眇めるダイゴのキスを受け入れる。ちう、軽く吸うだけの刺激が痺れるほど心地好い。堪らず舌先で纏れ合い、唾液の奏でる淫音が静寂に漂う。

「は、っ、ん……ふふ、余裕のないお前を見るのは気分

が良い」

「いじめないでくれ、ダイゴ。最初はあんなにうぶだつたのに」

「……ミクリがぜんぶ、おしえてくれたから」

「——まさか。どんなお前も、愛おしいよ」
外面がいわんを気にする男が、獣に成り下がるくらいに。

「ンっ！あ、んう……つちゅ、……ッ」

琥珀色が、蕩ける。口に含めばハニーミツより甘くほどけそうな色彩は、芳しい色香を放っていた。

「……それとも、お前好みの仕上がりではなかつたか？」

自信満々に誘うにはまだ羞恥も残るのだろう。伏せる瞼は綻ぶ前の花弁を思わせた。

美しい。夜明けが迫る蒼い闇にあって、その姿は月下美人のようだ。淫靡でありながら、清廉。危うげな魅力が奇跡的なバランスで積み重なつて、ツワブキダイゴを形成している。

目が離せない。瞬きすら惜しい。心奪われる存在に乞われて、張りぼての聖人を気取れるはずもなかつた。



扫描全能王 创建

ぐつと挿き抱いた痩身と体勢を入れ替える。後頭部に回した手で身動きすら封じ、花唇を貪り蜜を啜れば、合間にあえかな嬌声が満ちた。

銀灰を抱くたび、禁忌に似た悦楽に翻弄される。大事に育てられた花を手折るにも、ショーケースに飾られた宝石に手垢をつけるにも近い快感だ。

本人が聞けば笑い飛ばすだろう妄想に肚の底を滾らせて、青年に腰を擦りつける。脳が茹だる。うつとりと首筋や背を撫でて応じるダイゴも、先を待ち望んでいた。

白い肌に印を刻み、片手はサイドテーブルの引き出しに伸ばす。二段目の中身。潤滑剤の他にも視線を走らせ、しかし、リングを外した指先に止められた。

「ダイゴ？」

「……ローションだけで、足りるだろう。余計なモノはないらない」

「いいのかい。どれを使っても、お前は悦さそうだったけれど…」

言外にゴムすら不要だと伝える銀灰を覗きこむ。大切な恋人なのだ。出来る限り負担は減らしてやりたいし、きもちよくしてやりたい。

最後にシたときは念入りに残滓を挿き出したから大丈夫。そうちだつたが、毎回避妊具なしというのも…。

「おまえが、いい。ミクリとこうしているのが、一番、いいから……おまえだけ感じさせてくれ」

突き上げる感情の波に、のまれる。まっすぐ求める言葉に胸を打たれて、情けなくも声が震えないために一拍を要した。

「……仰せのままに。わたしの、かわいいひと」

ボトルだけを手に、ふたたび唇を重ねる。

役目を終えたオモチャ箱の蓋が閉まる。遮光カーテンの外が夜明けに滲んで、海を揺蕩うようだつた。

